

中国における古代青銅貨幣の生成と展開（六） —楚貝貨の性格—

江 村 治 樹

1 はじめに

中国先秦時代の青銅貨幣は、その形態によって大きく刀錢（刀幣）、布錢（布幣）、円錢（圓錢）、貝貨（貝幣）の四類型に分類されるのが一般的である。前三者についてはすでに検討したので⁽¹⁾、ここでは大きな範疇の中で最後に残った貝貨について考えてみたい。

青銅貝貨とされるものには、文字や記号のない無文銅貝と、蟻鼻錢や鬼臉錢⁽²⁾と呼ばれる文字や記号のある有文銅貝がある。ここでは流通貨幣として異論のない有文銅貝を取り上げる。この種の貨幣は、楚国の貨幣と考えられているので、以後、楚貝貨と呼称する。楚貝貨は、一度で万を超える数量の出土例があり⁽³⁾、大量に流通していたことがわかる。しかし楚貝貨は謎の多い貨幣である。他の類別の貨幣に鑄込まれた文字や記号の意味はそれほど難解ではなく、研究者によって意見が大きく分かれているわけではない。しかし、楚貝貨では、最も大量に流通した𠄎字貝貨や、それに次いで多い𠄎字貝貨については議論百出の感があり、現在でも確定的と言える見方は存在しない。また、流通時期、とくに流通開始の時期については、文献史料上も考古学的にも手がかりがなく、十分明らかにされているとは言い難い。本論では従来の学説を整理して問題点を明らかにし、可能な限り楚貝貨のデータを博搜してその性格の究明を目指したい。

2 楚貝貨の形式と文字

楚貝貨は楕円形をしており、寶貝（子安貝、中国では海貝、貨貝と称される）を模した貨幣とされている。背面は平らであるが正面はふくらんでおり、楕円の端に円孔が一つある。この円孔は背面まで透過していないのが普通である。正面に文字あるいは記号と思われるものが陰文で鑄造されている。他の三類型の貨幣はほとんどすべて陽文であるのと異なる。現在のところ、文字あるいは記号は12種類確認されている。𠄎字で代表されるもの（以下𠄎字系と称す）と𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎である（図1）。このうち、𠄎字系貝貨の発見量が最も多く、99%に上るとする説がある⁽⁴⁾。末尾の表4「楚貝貨出土数量・寸法・重量表」によっても、154,257点を越える発見点数のうち、𠄎字系貝貨は153,431点を越え、やはり99%を越える。二番目に多い𠄎字貝貨でも708点を越えるくらいで1%にはるかに満たない⁽⁵⁾。𠄎字貝貨以下で

(1)

地名「穰」(河南鄧県)説⁽¹⁰⁾、駢宇騫氏の「巽」字、すなわち「白選」の「選」字と見なして貨幣重量単位から貨幣名称に転化したとする説⁽¹¹⁾などや、「半両」説、「罅」と釈して地名「鄂」の古称とする説、「君」字として国家最高権力者を象徴するとする説などを挙げている⁽¹²⁾。

趙氏は、以上の解釈を整理すると貨幣の名称説、重量説、価値説、地名説の四種に帰納できるとし、このうち重量説、価値説の可能性は少ないと考えている。趙氏自身は、𠄎字を古文字中の「巽」字に近いとし、さらに進んで楚古文中の「鄂」字の可能性があるとしている。「鄂」とは楚国都の通称であり𠄎字は地名と言うことになる。ただし、趙氏はあくまでこれは可能性であり、「巽」字であることは確かとしても、「錢」と解釈したり、「白選」の「選」に通じるとする説があるように、貨幣の名称である可能性もあるとしている。

この他にも趙氏が挙げていない説が多く存在する。中でも、呉大澂の「貝」字説に従う研究者はかなり存在する。古くは鄭家相、彭信威氏があり、その後、汪慶正氏も「貝」か「貨」の異体字とし、李家浩氏も「貝」字としている⁽¹³⁾。また、「貝」と「貨」の合文とし、楚貝貨の専用字とする説や、「貝」字の変体か「貝化」の減筆とする説もある⁽¹⁴⁾。一方、駢氏や趙氏のように「巽」字と解する説も多い。陳衍麟氏は駢氏の説にそのまま従い、羅運環、楊楓氏は「巽」か「鍔」としている⁽¹⁵⁾。馮耀堂氏は𠄎字を「一貝」と読んで呉説に従う一方、「一巽」でも通じ、「巽」は「選」で黄金や青銅の計量単位で、銖と両の間の重量名称で6銖(最重の楚銅貝3.6gから計算して1銖=0.65g)の可能性があるとしている⁽¹⁶⁾。また、黄錫全氏は「巽」字説に賛同し、「巽」は「鍔」で「錢」と読むべきで、本来重量名であったものが貨幣名称となったものとしている⁽¹⁷⁾。この他、王猷唐氏は「坐」と釈し、周世榮氏は「箕」と解し捕魚の工具が転化したものとしている⁽¹⁸⁾。中には、劉志一氏などのように彝族の文字との関連から「銖」と解し、「銖」の古彝語の読音は「対」「双」「副」なので楚銅貝一個は一銖で海貝二個に相当したとする説もある⁽¹⁹⁾。最近では、陳隆文氏は𠄎字を穿孔の位置から上下逆に読んで「罅」と解し、楚が封建された湖北東南部の「鄂」地とみなして都域名としている⁽²⁰⁾。

𠄎字の理解についても多くの説があり、やはり趙德馨氏が旧説を紹介している⁽²¹⁾。初尚齡『古金初見録』の「埜」字説、『金石索』所引の桂馥の「昏塾水」説、高煥文『癖泉臆説』の「有土之本」説、馬昂『貨布文字攷』の「各六朱」説、方若『古錢補録』の「各一朱」説、鄭家相『中国古代貨幣発展史』の「女(汝)六朱」説、朱活『古錢新探』の「圣朱」や「資」説、前引李家浩論文に見える「五朱」説などである。しかし、趙氏自身はこの字は地名で、封君の封号とするが正確に釈読できないとしている。

朱活氏の「圣朱」は正確には「圣朱」で、<楚王畬志盤>に見える人名であることから、一種の美称と見なし、好銭の意味としているが、その後この説を改め「条」と釈して「資斧(錢財)」の「資」字とし、貨幣を意味するとしている⁽²²⁾。朱氏はいずれにしても貨幣の名称と考えているようである。黄錫全氏は、朱氏と同様に「圣朱」と釈しているが解釈は異なる⁽²³⁾。<王子申豆盤>の銘文から推測して、この字は「軽朱」と読むべきで朱より軽い銅貝貨の名称を示すとし

ている。釈読について、蔡運章氏は「五朱」説、王克讓氏等は「各六朱」説、羅運環氏等は「夬朱」説に従っている⁽²⁴⁾。この他、王猷唐氏は「隆朱」、奥平昌洪氏は「洛一朱」、彭信威氏は「守六朱」に釈読し、汪慶正氏は読み方は不明とするが計量単位の可能性があるとしている⁽²⁵⁾。

近年の理解では、第一字「夬」または第一字「夂」、第二字「土」の解釈は分かれているが、最後の文字を「朱」と読む点はほぼ一致している。朱は銖であり、計量単位として間違いないと考えられるが、最初の文字が地名かそれ以外の文字かが問題となる。汪慶正氏や黄錫全氏が論じているように、「夬朱」の文字は<王子申豆盤>に見え、「朱」より下位の一種の計量単位と見なしてよいように思われる。

この他の文字の釈読に関してはそれほど大きな分岐はない。𠄎字について黄錫全氏は「全」と読んで「巽」と解して𠄎字と同じ意味としているが、「金」と読むのが一般的で「鉞」の省文とする見方もある⁽²⁶⁾。王毓銓氏は𠄎字を「十化」と呼んでいるが⁽²⁷⁾、「鉞」あるいは「斤」と読むのが普通である。𠄎字は「行」、𠄎字は「君」、𠄎字は一例しか確認されていないが「貝」⁽²⁸⁾、𠄎字は「三」と読まれている。𠄎字は「甸」と読むのが普通であるが、「罍」と読む説もある⁽²⁹⁾。黄錫全氏はこの字と𠄎字を同種の文字と考え、「安」と読むのが長じているとしている⁽³⁰⁾。𠄎字貝貨は河南省商水県の人所有物で一例のみ確認され、「陽」と読んで楚国の陽氏に関係づけられているが真物かどうか不明であり、𠄎字貝貨も中国銭幣博物館寄贈の一例のみで「者匕」と読まれているがこれも真偽不明である⁽³¹⁾。

これらの𠄎字や𠄎字以外の貝貨の発見例は極めて少ないが、𠄎字や𠄎字の楚貝貨とともに発見されることが多く、楚貝貨と考えて問題ないであろう。それぞれの文字の意味については計量単位、貨幣名称、地名、あるいは吉語とされたりしてばらばらであり、全体としての統一的な解釈は存在しない。

以上、楚貝貨とされる貨幣の文字の解釈について見てきたが、やはり解釈において最も問題が残るのが、最大流通量を誇る𠄎字貝貨である。𠄎字の釈読を困難としているのは、『説文』はもちろん、銅器銘文、簡牘など古文字資料に類似の文字が見当たらないことによる。上述のように「貝」字説と「巽」字説が多いが、近年では字形上から「巽」字説が有力になってきている。趙德馨氏は、「巽」字とする根拠として、曾侯乙墓出土編磬銘文、馬王堆漢墓帛書や『説文』の文字を挙げているが、字形はそれほど似ているとはいえない。ただし、銀雀山漢墓竹簡 694 号簡の「選」字の「巽」は一致するように記している。しかし、この簡には「選」字は見当たらず、969 号簡に「選材官、量蓄積、課勇士」とあり、「巽」字を含む文字が二つ存在する。前者は原簡では文字は消えており、後者も明瞭ではないが𠄎字と似ているとは言えない。戦国時代の『包山楚簡』271 号簡に見える「縵」字の「巽」も𠄎字には似ていない⁽³²⁾。なお、郭若愚氏によると、『古璽滙編』官璽 161 に「鑄貨客罍」印、上海博物館蔵印 41427 に「右鑄貨罍」印がある⁽³³⁾。郭氏が「貨」字としている文字は𠄎字そのものである。しかし、これらの印文からは、𠄎字貝貨を鑄造する機構の存在が確認できても、𠄎字の意味を解説する手掛かりにはならない。

『包山楚簡』の文字に含まれる「口」字はほとんど𠄎字と同じ逆三角形になっており、𠄎字の上部は「口」二つとしてよいと思われる。『説文』には「𠄎驚嘩也」とある。下部はやはり『包山楚簡』に「丌」と「元」の二種が見え、「其」字である。そうすると𠄎字は「巽」字となるが字書にはなく、依然として含義は不明である。

他の諸国において大量に出土している統一貨幣と考えられる貨幣の銘文は、国名あるいは国都名か計量単位である。秦の円銭「半兩」の「兩」は計量単位、燕明刀の「明(𠄎)」は国名、斉三字刀「斉大刀」の「斉」は国都名でありかつ国名である。また、楚国の金版のうち大多数を占める「郢爰(𠄎)」の「郢」は国都名である。𠄎字貝貨も圧倒的多数を占めることから楚国発行の統一貨幣と考えられ、国名、国都名か計量単位の可能性がある。𠄎字が「巽」字ならば、楚に関わる国名や国都名と関連させることは困難である。𠄎字貝貨について多く発見されている𠄎字貝貨の文字が計量単位と考えられることから、𠄎字も計量単位の可能性があるが、楚国において「巽」字のような計量単位は確認されていない。𠄎字貝貨の性格については、その流通時期や流通範囲の関係からも考える必要がある。

3 楚貝貨の流通時期の問題

趙徳馨氏は楚貝貨の出現時期についても従来の説を紹介している⁽³⁴⁾。戦国中期より後とする説(張天恩、郭若愚)、戦国初期説(李家浩、汪本初)、春秋末年説(朱活)、春秋晩期以前か更に早いとする説(淑芬)、春秋中葉前後とする説(蕭清)、そして春秋に入ってそれほどたっていない時期とする説(舒之梅)などである⁽³⁵⁾。趙氏自身は、『史記』循吏列伝の孫叔敖伝に見える楚の莊王(前613 - 前591年)の幣制改革以前に楚貝貨が使用されていたとし、春秋中葉には出現していたと考えている⁽³⁶⁾。

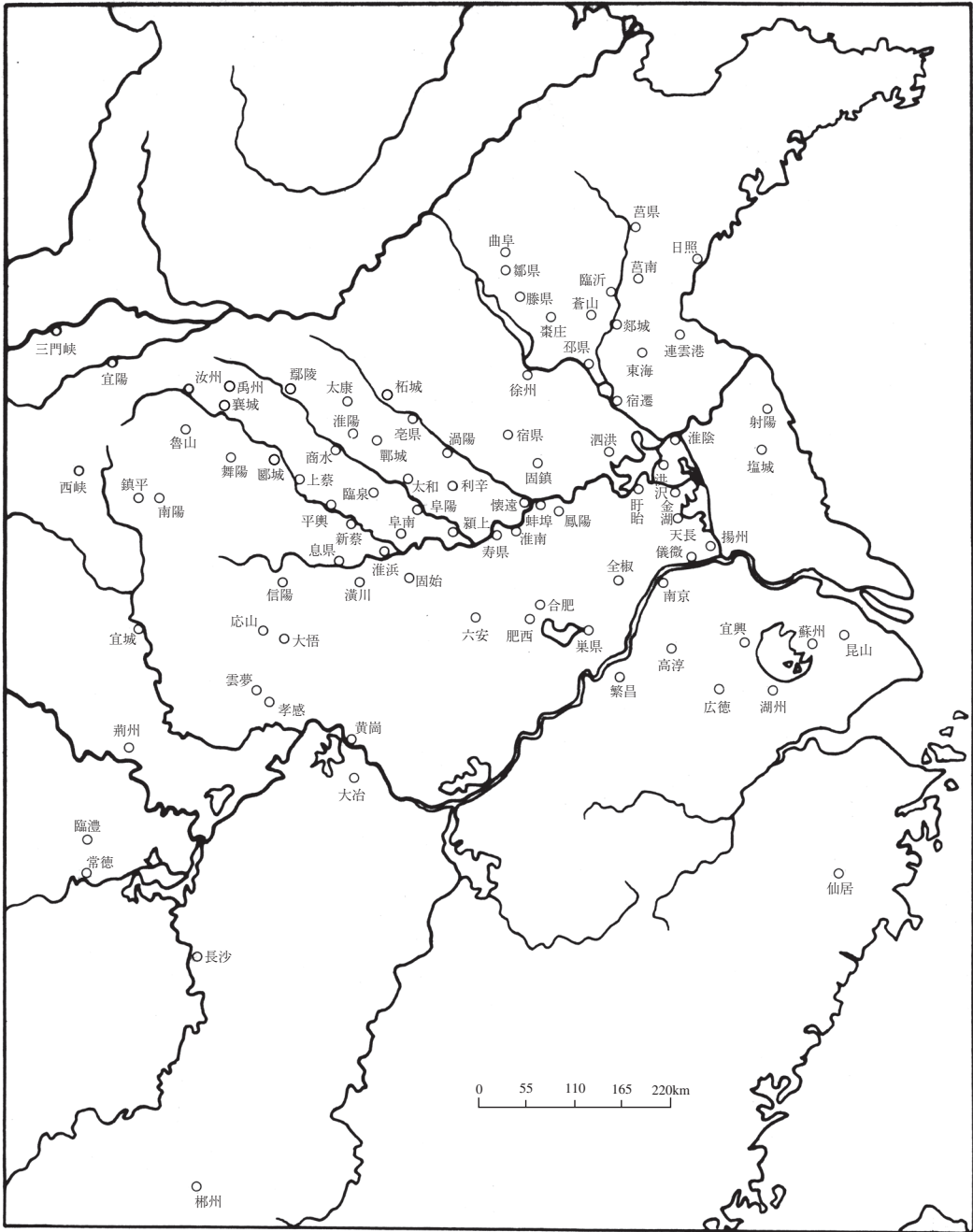
以上の研究者以外にも流通時期について言及している研究者が何人もいる。鄭家相氏は、河洛の間で開始された銅貝貨は楚地である淮汝の間に進展し、戦国時代になって著文銅貝(有文銅貝)となったとしている⁽³⁷⁾。汪慶正氏は、楚莊王の幣制改革と関連づけるのは早きに過ぎ、戦国晩期墓から発見されていることから、各種楚貝貨はみな戦国晩期の通貨であるとしている⁽³⁸⁾。汪昌橋氏等は楚貝貨を合金成分、とくに銅含有量から三類に分類し、楚銅貝の出現とその後の展開を論じている。第一類は銅含有量が最も多い精品であり、楚国早中期の腹地である湖北から主に出土していることから、鑄造年代は楚の国力の充実した戦國中早期かやや早い時期の貨幣とする。その後、銅含有量はしだいに減少し鉛が増加して質の低下が起こるが、これは国力の低下と秦の圧力による東遷と対応していると考えられる。すなわち、第二類は主に河南東部、安徽西北部から出土しており戦國中晩期、第三類は安徽東部、江蘇北部、山東南部から出土し戦国晩期の貨幣としている⁽³⁹⁾。魏航空氏等は、楚貝貨の墓葬出土例は戦国晩期に集中しており、この時期には大面積に分布し、形態も統一されていることから成熟期に当たり、初期の流通はそれより早く、戦国

中期より遅くないとしている⁽⁴⁰⁾。黄錫全氏は、𠄎字と𠄎字貝貨は春秋末から戦国早中期とされる雲夢楚王城第四層文化層から出土しているが、これらの貨幣は形状から戦国中期のものと考えられ、春秋晩期の淅川下寺楚墓に銅貝が副葬されていないことから、有文銅貝は戦国早期の始鑄である可能性があるとしている⁽⁴¹⁾。そして、𠄎、𠄎は終始並行して使用されたが、附随品である𠄎は戦国早期、𠄎、𠄎、𠄎は戦国中期、𠄎、𠄎、三、𠄎は戦国晩期に出現した可能性があるとしている。なお、朱活氏も楚貝貨の展開を早、中、晩期の三つの時期に区分している⁽⁴²⁾。早期は戦国初年かやや早い時期で𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎が出現し、中期には𠄎、𠄎が並行して流通するが、秦が楚都鄢を陥落させた楚頃襄王 23 年（前 276 年）以後、楚貝貨は𠄎に統一されるとし、これを晩期としている。

楚貝貨の流通時期について、春秋初から戦国後期まで意見が大きく分かれている。これは、楚貝貨が埋蔵銭として発見されたり、地表上から採集されたりすることが多く、考古学的に年代を確定することが困難だからである。ただし、年代が推定できる墓葬からの出土もままある。上述のように、汪慶正氏や魏航空氏等は戦国晩期の墓葬から出土していることから、始鑄は戦国晩期かそれよりやや前と考えている。末尾の表 4「楚貝貨出土数量・寸法・重量表」を見ても、湖南省の発見（表番号 18 - 30）はすべて戦国楚墓からの出土であり、時期が絞れる例は戦国晩期や中期偏晩である。また、河南省淮陽県平糧台の楚墓（表番号 61 - 64）も戦国晩期であり、楚貝貨は戦国晩期には確かに流通していたことが分かる。問題は、それより以前、どこまで時期を遡れるかである。年代の参考になるのは表の 8 雲夢楚王城第四文化層の出土の例であるが、上述の黄錫全氏の指摘のように、出土の楚貝貨の年代を第四文化層の年代、すなわち春秋末から戦国早中期とそのまま断定するには問題がある。このように、考古学的に直接始鑄の年代を確定できないとなると、他の方法により推測するしかない。次に出土範囲からこの問題を考えてみたい。

4 楚貝貨の流通範囲と時期の関係

「楚貝貨出土分布図」は、現在出土位置を知ることができる楚貝貨を中心に作成した末尾の表 4「楚貝貨出土数量・寸法・重量表」に基づいている。これは大多数を占める𠄎字系貝貨の分布範囲をほぼ示していると考えてよい。この分布図によると、湖北、湖南、河南南部、安徽、江蘇、山東南部の広い地域に出土が広がっている。ただし、出土が集中している地域は、河南東南部、安徽北部、江蘇西部と南部であり、表 1「楚貝貨出土回数表」を見ても河南南部、安徽、江蘇の出土例がとりわけ多い。この地域は、楚国晩期の国都が置かれた、河南淮陽（陳）や安徽寿県（寿春）を含む地域である。一方、楚国の本来の領域であり、前 278 年に陳に遷都するまで都があった江陵県を含む湖北やその南部の湖南北部は意外と出土例が少なく、分布も散開している。この分布の傾向は何を意味しているのか、戦国期の楚国の領域変化との関係から探ってみたい。



楚貝貨出土分布図

表1 楚貝貨出土回数表

	湖北	湖南	河南南部	安徽	江蘇	山東南部
全体 (𠄎字系内数)	16 (13)	13 (11)	45 (20)	60 (53)	33 (23)	18 (14)
𠄎字系以外その他 (𠄎字内数)	4 (4)	5 (5)	12 (9)	16 (11)	0	1 (0)

(1) 楚の東方進出と楚貝貨の流通範囲

楚国の東方への領域拡大はかなり早く、すでに春秋中期後半に始まる。『春秋左氏伝』によると、襄公3年(前570年)に楚は呉を攻撃している。その後も楚と呉の抗争は続く。一時楚は呉の反撃を喰らい、楚昭王の時の前506年には国都を占領される事態も生じているが、楚の東方進出は一貫して進められている。『左氏伝』によると、哀公17年(前478年)に楚は陳を滅ぼしているが、『史記』楚世家では、この時陳は滅ぼされて県とされたとある。

戦国時代に入ると、楚は恵王42年(前447年、平勢・前448年⁽⁴³⁾)に州来(安徽寿県)に遷った蔡を滅ぼし、その44年には山東半島にあった杞を滅ぼしている。楚世家によると、この時、「楚は東侵して地を広め、泗上に至る」とあり、楚は山東半島の奥深くまで攻め込み、領域は江蘇北部、淮水の北、泗水のほとりにまで及んでいたことになる。そして、楚簡王元年(前431年、平勢・前433年)には山東南部の莒も滅ぼしている。

楚貝貨の分布を見ると、山東南部の地域で相当数出土している。北部の杞の旧領域(濰坊市附近)からは出土していないが、莒国のあった莒県からは出土の記録がある(表4番号155)。しかし、戦国の早い時期にこの地域で楚貝貨が流通していたかは疑問である。後述するように、戦国前期、中期の楚国都は湖北江陵にあったが、湖北地域の楚貝貨の出土例は少なく、楚貝貨が戦国前期まで遡ることができるか問題である。また、山東半島は戦国中期、後期においても斉の勢力が強く、斉の貨幣が流通している⁽⁴⁴⁾。『史記』田敬仲完世家によると、前284年、燕を中心とする連合軍が斉に攻め込んでまたたく間に斉地を占領した。国都臨淄を陥された斉の湣王は莒に逃げ込んだ。そこで楚は淖齒に軍を率いて救援させたが、淖齒は逆に湣王を殺してしまった。淖齒が莒を去った後(『戦国策』齊策六では淖齒は莒人に殺されたことになっている)、莒の人は湣王の子を擁立し、燕の占領下で莒を守り通した。この時期、魯国の領域を除いた莒県より南は楚の勢力圏にあり、この地域出土の楚貝貨はこの時期に流通したものである可能性がある。

戦国中期、楚威王の時、『史記』越王勾踐世家には(楚世家から威王7年(前333年、平勢・前340年)のこととされる)、越が楚を攻撃したのに対して、「楚威王は兵を興して之を伐ち、大いに越を敗り、王無彊を殺して尽く故の呉地を取りて浙江に至り、北のかた斉を徐州に破る。而して越此を以て散ず」とある。楚威王の時には、楚は越を滅ぼして江蘇全域を領有し、さらに浙江まで領域を広げたことになっている。

楚貝貨の分布を見ると確かに江蘇地域に集中部分が見られる。しかし、浙江の分布は稀薄であ

り、この時期に楚貝貨が浙江地域に流通していた可能性は少ない。また、戦国中期に江蘇地域に楚貝貨が流通していた可能性も低いであろう。この時期においても楚の本拠地は湖北にあり、江陵の国都も健在である。さらに、太田麻衣子氏によると、戦国中期には、楚はまだ淮水 downstream や江東を制圧できておらず、楚の勢力がこの地域に確立されるのは戦国後期の陳への東遷以降のことのようである⁽⁴⁵⁾。支配の不安定な地域にその国の貨幣が大量に流通していたとは考えられない。江蘇、浙江における楚貝貨の流通は時代が下ると考えてよいであろう。

(2) 楚の東遷と楚貝貨の流通範囲

次に、秦の東方進出と、それにとまなう楚の東遷の過程を『史記』の記述を中心にたどってみよう。まず、秦が楚に対して攻勢に出るのは、楚世家、秦本紀、六国年表によると、楚懐王 17 年（秦恵文君更元 13 年、平勢・楚懐王 15 年、前 312 年）である。この時、楚と秦は丹陽で戦い、楚が大敗して楚の將軍屈匄が捕虜になり、八万人が斬首されている。ついで秦は楚の漢中を攻め取り、漢中郡を置いている。

その後、秦は楚の北辺を脅かし続ける。秦昭襄王 6 年（楚懐王 28 年、平勢・楚懐王 26 年、前 301 年）にも秦が楚を攻撃して大破し、楚軍の死者は二万人に上ったとされる。翌年には秦は新城（河南平頂山附近）を陥落させ、その翌年新市（湖北京山県東北）を取り、またその翌年（秦昭襄王 9 年、楚頃襄王元年、平勢・楚懐王 29 年、前 298 年）にも楚の八城を取り、楚の將景快を殺している（以上、秦本紀）。楚世家によると、頃襄王元年（平勢・秦昭襄王 11 年、前 296 年）、秦は武関を出て楚を攻撃し、楚軍を大破して五万人を斬首し、析（河南西峡県）の十五城（六国年表は十六城）を取って引き上げたとある。また、秦本紀では、昭襄王 13 年（平勢・前 294 年）、左更の白起が新城を攻め、15 年には大良造となった白起が楚を攻めて宛（河南南陽市）を取り⁽⁴⁶⁾、16 年には左更司馬錯が鄧（湖北襄樊市）を取ったとある。また、この年には公子市が宛に、公子悝が鄧に封じられている。

その後、秦本紀では、昭襄王 27 年（平勢・前 280 年）には司馬錯が楚を攻め、罪人を赦免して南陽に遷し、28 年には白起が楚を攻めて鄧、郟（湖北宜城県）を取り、罪人を赦免してそこに遷しており、宛や鄧の地域の支配の強化を進めている。一方、楚世家や六国年表によると、楚頃襄王 19 年（平勢・頃襄王 17 年、前 280 年）に秦が楚を打ち破り、楚は上庸（湖北房県西）と漢北の地を秦に割譲しており、翌年には秦將白起が楚の西陵（湖北宜昌市）を陥落させ、江陵の楚都郢の西部にまで迫っている。

そして、楚世家の頃襄王 21 年（秦本紀の昭襄王 29 年、平勢・頃襄王 19 年、前 278 年）、秦將白起がついに楚都郢を陥落させ、楚王は東北に逃走して陳（河南淮陽県）に遷都した。六国年表では、白起は郢都を陥落させた後、さらに東に進んで竟陵（湖北潜江県西）まで至り、占領地を南郡としたとある⁽⁴⁷⁾。また秦本紀によると、昭襄王 35 年（平勢・前 272 年）、秦は南陽郡を置いている。ここに、河南西南部から湖北の地域はほぼ秦の領域として固まったことになる。

楚世家や六国年表によると、楚都陥落の翌年、楚頃襄王 22 年（平勢・頃襄王 20 年）、秦は蜀

方面から進出して楚の巫郡、黔中郡（湖南西部）を占領したが、その翌年、楚王は楚の東方の軍隊を結集して秦に対して西に反撃を試み、秦が陥落させた長江沿岸の15邑を取り返し、郡を置いたとある⁽⁴⁸⁾。この時、湖南西部は再び楚の領域となり、滅亡まで保持されたと考えられる。湖南西部の戦国晩期の墓葬から楚貝貨が出土するのはこのためである。

楚が陳に遷都した後も、秦の東方進出は続く。とくに、楚が東遷した後は魏と韓が秦の攻撃の矢面に立たされる。六国年表によると、秦昭襄王32年（魏安釐王2年、前275年）に秦は魏の二城を陥落させ、国都大梁（河南開封市）の城下にまで迫っている。秦本紀によると、莊襄王元年（前249年、平勢・前250年）に秦の蒙驁の攻撃により韓は成皋、鞏（河南滎陽県と鞏県）を献上し、秦の国界は大梁にまで達しており、秦は初めて三川郡を置いたとある。秦始皇本紀では、秦王政の3年（前244年）、蒙驁は韓を攻めて十三城（六国年表では十二城）を取り、5年（魏景湣王元年、前242年）には魏を攻めて二十城を取り、初めて東郡を置いたとある。

楚は陳に遷都した後、魏や韓の背後にいて秦による直接の攻撃を避けることができたが、この時期になると秦は占領地に郡を置いて足場を固め、韓、魏の抵抗も限界が見えてきたものと考えられる。楚は考烈王22年（秦王政6年、前241年、平勢・前240年）、諸侯とともに秦を攻撃して失敗した後、東方の寿春（安徽寿県）に遷都する（楚世家、六国年表）。楚が滅亡するのはその20年足らず後である。

秦による楚の領域の占領と楚の東遷の過程は以上のごとくであるが、この過程と楚貝貨の分布範囲との関係を考えてみよう。秦は占領地では旧国の貨幣を排除し、自国の半両銭を流通させた⁽⁴⁹⁾。このことは秦の占領地の拡大にともなって半両銭の流通範囲が拡大していることから証することができる。ある地域で、秦の占領期間が長ければ、当然従来から流通していた楚貝貨の出土例は少なくなるであろう。また、秦が占領する以前に長期にわたって楚貝貨が流通しておれば、楚貝貨の出土例は多くなるはずである。

最初に述べたとおり、楚貝貨の出土例や数量が圧倒的に多いのは、河南南部、安徽、江蘇の地域である。この地域は、楚が秦の圧迫によって国都を東に遷都した地域とほぼ一致しており、これらの地域出土の楚貝貨は、陳や寿春に国都が置かれた前278年以後に発行された可能性が高い。

青銅貨幣は一般に、時代が下るにしたがって増量のための鉛の含有量が増え品位が低下し小型化するとされる。これは発行数量の増加や発行者の経済力の低下とも関係していると考えられる。表3を見ると、山東鄒県出土の4点の楚貝貨は鉛が多く錫が少ないことから、かなり時代が下るとみられる。それに対して安徽出土の楚貝貨は、肥西県のものを除いて鄒県のものより鉛の含有量が少なく錫も多く品位が高いため、時代はそれより早いであろう。鄒県のあたりは戦国時代には魯の領域に含まれており、この地出土の楚貝貨は魯が楚に滅ぼされる考烈王14年（前249年）以後に流通したものと考えられる。上述のように楚が寿春に遷都するのは前241年であるから、安徽出土の多くの楚貝貨は寿春遷都以前、陳に国都があった時期に流通した可能性が高い⁽⁵⁰⁾。ただし、安徽肥西県出土のものは鉛が銅よりも極端に多く、山東鄒県のものより時代が下り、最末期に発行され

表2 𠄎字系貝貨重量表 (g)

	湖北	湖南	河南南部	安徽	江蘇	山東南部
最大と最小 (その平均値)	7-1.59 (4.87-2.88)	2.6-1 -	4.25-0.1 (3.4-1.23)	5.65-0.52 (3.43-1.33)	5-0.5 (3.9-1.12)	4.2-0.5 (3.3-1.44)

表3 𠄎字系貝貨成分表 (平均値%)

	湖北 孝感 (5個)	安徽 臨泉 (21個)	安徽 阜陽 (10個)	安徽 渦陽 (1個)	安徽 固鎮 (1個)	安徽 肥西 (33個)	安徽 繁昌 (13個)	山東 鄒県 (4個)
銅 (Cu)	74.55	64.29	65.23	66.77	76.52	34.27	68.66	69.97
鉛 (Pb)	11.77	25.48	22.89	13.60	17.84	55.76	21.23	30.49
錫 (Sn)	12.93	7.34	8.55	17.35	6.57	1.90	10.06	0.77

た楚貝貨であろう。江蘇出土のものは現在のところ成分分析がなくなんとも言えない。ただし、国都陳からずいぶん南方に離れた安徽南部の繁昌県で品位の高めのものが出土していることから、江蘇でも楚都陳の時期の貝貨が流通していた可能性はある。

以上要するに、楚貝貨が大量に流通するようになるのは楚が陳に遷都してからではないかと考えられる。楚都陳の位置する地域は、戦国時代を中心とする時代に都市が発達し、経済の顕著な発展が見られる地域である⁽⁵¹⁾。楚は秦に追われ、結果として経済が活況を呈する地域の真っ直中に遷都したことになる。楚がこのような新たな経済状況に対応するため、大量の貨幣を発行する必要に迫られたことは十分考えられるであろう。表1や表4に見られるように、河南南部や安徽地域で𠄎字系貝貨以外に𠄎字系やその他の種類の貝貨が多く出土するのも、楚が経済的に多様な対応を迫られたためではなかろうか。

楚貝貨が陳に国都が置かれた時期に大量に流通したと言っても、始鑄の時期がそれ以前の湖北江陵に国都があった時期に遡ることを否定するものではない。湖北孝感市あたりは、上述のように前278年に楚が東遷して秦の南郡が置かれるまで楚の領域であった。表3の孝感出土の5点の楚貝貨は、鉛が少なく銅や錫の含有量が多い高品位のものである。これらは、安徽出土のものとは比べると品位が高く、時代が遡るものとみられる⁽⁵²⁾。また、表2を見れば、湖北出土の楚貝貨は、安徽出土のものとは比べて重量があるものが多く初期の状態を示している。このことから、楚の国都が江陵にあった時期からすでに楚貝貨が発行されていたことは確かであろう。しかし、湖北地域の楚貝貨の出土例や出土数量はあまり多くなく、大量に流通した形跡はない。したがって、楚貝貨が、楚が東遷する以前から長期にわたって発行され続けたとは考えられず、始鑄の時期はそれほど早くなく、戦国後期に入ってからではないかと考えられる。

5 楚貝貨の寶貝との関係と貨幣としての性格

(1) 寶貝の性格

楚貝貨は、新石器時代以来貴重視されてきた寶貝がモデルとなっているとされている。まず寶貝の性格について考えてみたい。

寶貝は早く新石器時代に墓葬の副葬品として出現し、漢代以後も辺境地帯で使用されつづけている。寶貝は日本では子安貝とも呼ばれ、中国では海貝、貨貝と称されている。中国で出土する寶貝のほとんどはキイロダカラ (Cypraea moneta Linnaeus) とハナビラダカラ (Cipraea annulus Linnaeus) とされており、現在でも西太平洋からインド洋沿岸の浅い海に広く棲息する一般的な寶貝である⁽⁵³⁾。黄錫全氏によると、仰韶文化の姜寨遺跡の墓葬や青海仰韶文化の墓葬から出土しており、河南偃師県の二里头文化の墓葬にもかなりの数量副葬されている⁽⁵⁴⁾。殷代になると、墓葬からの大量出土の例が見られる。二里崗文化の鄭州白家庄墓からは460余点、安陽殷墟5号墓(婦好墓)から6,880点、山東益都県蘇埠屯大墓から3,790点出土しているとされる。また、殷墟の墓葬には普通に寶貝の副葬が見られる。そして、西周時代になっても大量の寶貝の副葬は一般に見られ、車馬具の装飾としてもかなりの出土例があり、春秋戦国時代でも引き続き墓に副葬されている。

このように新石器時代以来、大量に使用された寶貝について、ほとんどの中国の研究者は、一貫して貨幣として流通したとみなしている。早い時期の中国貨幣研究を代表する鄭家相、王毓銓、彭信威氏等はみな寶貝を初期の貨幣として疑っていない⁽⁵⁵⁾。鄭家相氏は、寶貝を自然物貨幣とし、黄帝時の貨幣制度開始より周末に至るまで普遍的に使用されたとし、王毓銓氏も寶貝は中国古代で貨幣として用いられたことは疑いなく、秦始皇帝が中国を統一して貨幣制度を改革するまで長期にわたって使用されたとしている。彭信威氏は、寶貝は初めは装飾品として用いられたが、<遽伯鬲卣>の銘文に青銅器の価値が寶貝の数量で示されていることから、殷代から周初にかけて真正な貨幣となったとしている。ただし、この後も装飾品としても用いられたことは否定していない。

その後、中国古代貨幣の研究に大きな影響を与えた朱活氏も、寶貝を中国で最も早い貨幣の一つとし、やはり<遽伯鬲卣>の銘文から貨幣であったことは疑いないとしている⁽⁵⁶⁾。汪慶正氏は、寶貝は新石器時代以来、一種の実物貨幣として用いられ、西周時代には通用貨幣となったとしている⁽⁵⁷⁾。しかし、西周中期以後金属称量貨幣の出現とともにすでに過去の財富の象徴となり、しだいに装飾品としての地位に下落していったとする。近年では、黄錫全氏が、寶貝が貨幣であったことを詳細に論証しようとしている⁽⁵⁸⁾。黄氏によると、寶貝は、新石器時代、最初は外来の珍奇な装飾品にすぎなかったが、しだいに使用価値を備えた物品から離脱し、一般的等価物(交換の媒介)の特殊商品、すなわち実物貨幣(あるいは自然物貨幣)に転化したとする。夏代(二里头文化期)になっても寶貝は一種の貨幣であったことは疑問の余地はなく、殷代には、甲骨文や金文資料から見て、寶貝はすでに価値尺度、流通手段、貯蔵手段、支払い手段(賞賜)

の機能を備えており、主要な流通貨幣として真正な貨幣となったとしている。ただし、まだこの時期には主として奴隸主貴族や商人の間で流通し、一般貧民間での流通は多くはなかったとする。しかし、西周時代になると、貧民墓からも出土するようになり、さらに普遍的に使用されるようになったとしている。とくに、西周時代の寶貝の購買力については金文の実例を多く挙げ、寶貝が貨幣としての機能を備えていたことの証拠としている。そして、寶貝は財富の象徴として用いられる場合もあるが、秦の統一まで貨幣として使用されつづけたとしている。

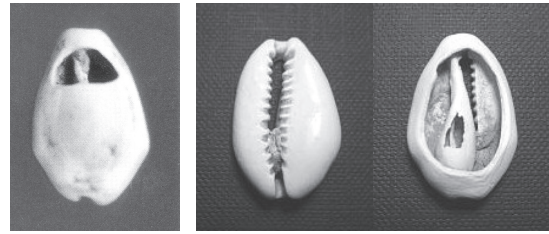
以上のごとく、中国の研究者の寶貝に対する見解はほぼ一致しているように思われるが、日本の研究者には否定的な見解が存在する。佐原康夫氏は、殷周時代から戦国時代の寶貝の副葬法を整理し、寶貝は呪術的葬具か装飾品として一貫した解釈が可能で、貨幣として機能した事例は見当たらないとする⁽⁵⁹⁾。そして、西周中期の金文には価値としての尺度として貨幣の一部をはたしている事例があるが、これは一種の身分制的計算貨幣として限定的に機能したものであって、当時の全社会まで一般化して考えることはできないとしている。また、近年、柿沼陽平氏も、殷周時代の寶貝の収集経路、流布形態、社会的機能を分析し、寶貝は生命と再生のシンボルとして支配者間の贈与交換に用いられたもので、貨幣説は従いがたいとしている⁽⁶⁰⁾。

寶貝は、上述したように、出現当初の新石器時代から、ほとんどが墓葬の副葬品として出土していることは疑いない事実である。しかし、中国において一般に流通貨幣として異論がない青銅貨幣は、出現の最初は埋蔵銭として出土し、墓葬から出土する例はほとんど皆無と言ってよい。青銅貨幣が葬送儀礼の一環として墓葬に副葬される例がめだつようになるのは、出現から何百年もたった戦国後期頃からで、一般に普及するのは漢代になってからである。貨幣の副葬が慣習化するのは戦国後期以後と考えられ、それ以前に多く副葬された寶貝が貨幣として副葬されたとは考えられない。佐原氏や柿沼氏の言うように、寶貝は単に貴重な財富や呪物として副葬されたにすぎないであろう。

(2) 楚貝貨と寶貝との関係

寶貝が貨幣でないとすれば、貨幣としての楚貝貨とはどのような関係にあるのであろうか。楚貝貨の形態は寶貝がモデルとされているが、厳密に見ていけば相違点も存在する。キイログカラやハナビラダカラなどの寶貝の成貝は、殻頂部がやや広がり、下部がすぼまっているが、楚貝貨のほとんども同様である。また背面がふくらみ、腹面が平らになっている点もよく似ている。しかし、寶貝と楚貝貨の形態上の決定的な相違は、楚貝貨には寶貝の腹面に当たる平らな面に縦の溝とその両側の歯状部分がなく平滑な点である。この点、楚貝貨は寶貝を忠実に模倣したものではなく象徴的に模倣したものと思われ、直接連続しているとは言えない。むしろ、骨貝、石貝、玉貝、銅貝、金貝など倣製貝とされるものの方が腹面に溝や歯があり、寶貝と形態上連続している。近年では、これら倣製貝は貨幣ではなく装飾品とみなす説が多い⁽⁶¹⁾。加えて、楚貝貨は他の青銅貨幣と同様、初期のものは墓葬から出土することはほとんどない。この点においても、寶貝と楚貝貨は連続性が断ち切られている。

しかし、両者の連続性に関して注目されるのは、楚貝貨には種類を問わずふくらみのある面（文字がある面、宝貝の背面）のすぼまっている部分の端にほとんど必ず小孔がある点である（図1参照）。実は、出土する宝貝にはほとんどに加工が施されており、背面に穴が開けられている。戴志強氏は、その穴の大きさによって、小孔式、



①大孔式

②背磨式（表、裏）

図2 宝貝の背面加工

大孔式、背磨式の三つの発展段階があるとしている（図2）⁽⁶²⁾。小孔式や大孔式では、すぼまっている部分に穴が空けられている場合が多い。背磨式では、背面の大部分が除去されて大きな円孔になっていて、巻き貝である宝貝の中心部全体が露出して見栄えはよくない。側面は背面のふくらみがなくなり薄ぺらく見える。彭信威氏は、背面穿孔のもの（小孔式や大孔式）は貨幣用であり背面磨平のもの（背磨式）は装飾品用としている⁽⁶³⁾。

陝西長安県澧西の西周墓葬と車馬坑から多数の宝貝が出土している⁽⁶⁴⁾。車馬坑に埋葬された馬の頭部には、宝貝が装飾として帯状に縫いつけられた口覆いが装着された状態で発見されたが、それらの宝貝の背面は磨平されていた。これに対して、墓葬出土のものは穿孔があるものか無孔のものであったとされている。宝貝の特徴は歯状の溝のある腹面の方であり、この面を表として革や布に縫いつけて固定するにはどうしてもふくらんでいる背面を平らにする

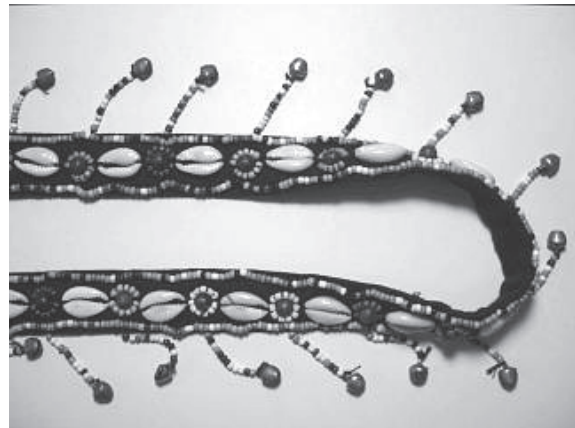


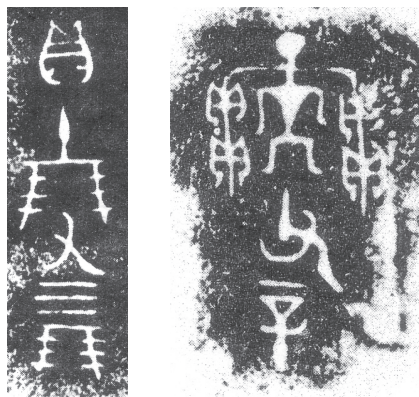
図3 現代の宝貝装飾品（東南アジア？）

必要がある。現代の宝貝の装飾品もそのようになっている（図3）。彭氏が言うように、背磨式の宝貝は装飾品用として間違いないように思われる。

では、小孔式、大孔式はどのように考えられるであろうか。これらの穴、とくに大孔式は紐を通して数珠のように繋ぐためだと考えられる。殷周時代の甲骨、金文では宝貝は「朋」を単位として数えられる場合が多い。「朋」字は二繋ぎの宝貝で表される（図4）。王国維氏は、古では宝貝5個を一繋ぎとし、二繋ぎが一朋とされたとしている⁽⁶⁵⁾。そうすると一朋は宝貝10個ということになる。一朋の数については異論があるようであるが、殷周時代では宝貝は支配者間で朋を単位として大量に贈与交換に用いられることが多かった。小孔のある楚貝貨は、形態上、装飾用の背磨式の宝貝ではなく、贈与交換用の大孔式の宝貝をモデルにしていると考えてよい。

上述の戴志強氏によると、大孔式と背磨式はすでに殷代に出現しているとする。そしてその後、西周から春秋期になると背磨式がさらに普遍的となり、大孔式の宝貝はしだいに消滅していったとしている。

柿沼陽平氏は「殷周宝貝出土地一覧表」を作成し、殷以前（夏代、二里頭）から西周以降（春秋戦国）までの宝貝、倣製貝、楚貝貨の出土地、出土数量、形態を表示している⁽⁶⁶⁾。表の中、西周と西周以降（春秋戦国）の部分の「質」の欄で「真」として



① 遽伯鬲卣

② 荷貝父辛爵

図4 金文の「朋」字関係字

いる宝貝をピックアップして、大孔式と背磨式の出土状況を見てみると次のようになる。西周時代の宝貝の出土例は130あるが穿孔状態が不明なものが多く、大孔式と考えられる例（表の「形態」欄に一孔、穿孔、大孔、小孔とあるもの）は35例、背磨式と考えられる例（磨背、背磨、磨孔とあるもの）は16例ある。大孔式がかなり多い点は、西周時代に朋を単位として盛んに贈与交換されていたことと対応する。西周以後（春秋戦国）の出土例は70挙げられている。この内、大孔式（一孔、穿孔、大孔、小孔、有孔とあるもの）は8例であるが、背磨式（磨背、磨穿、磨貝、磨製、両面磨とあるもの）は14例と多くなっている。確かに装飾用と考えられる背磨式が多くなっているが、大孔式もかなりみとめられる。

表では、春秋戦国期の大型式宝貝の出土地は河南偃師、山東淄博、遼寧大連、安徽亳州、河北邯鄲、四川雅江、山西長治となっていて、初期の楚貝貨が流通したと考えられる湖北や河南南部は含まれていない。とくに湖北のこの時期の宝貝出土は皆無であり、河南南部の楚の領域に含まれる春秋晩期の淅川楚墓出土の宝貝の形態も不明となっている。しかし報告書によると、下寺2号墓出土の3,960点の宝貝は明らかに背磨式である⁽⁶⁷⁾。また、和尚嶺、徐家嶺楚墓出土のものも報告書を見る限りみな背磨式である⁽⁶⁸⁾。

西周期においても、楚の本拠地である湖北には宝貝の副葬は見られず⁽⁶⁹⁾、楚の領域では本来、宝貝を貴重視して贈与交換に用いる習慣がなかったと考えられる。このような習慣があったのは、殷周時代以来の主として黄河中流域の中原地域である。楚は、戦国時代後期になって、中原地域で行われていた支配者間の古い伝統を踏まえて楚貝貨を貨幣として発行したと考えられる。楚貝貨は、宝貝という実物貨幣が一般的等価物としての貨幣に転化したものではなく、極めて観念的に創造された貨幣であったのである。

6 むすびにかえて

すでに述べたのように、𠄎字貝貨は圧倒的な出土例を占め、楚貝貨における単一性を際立たせている。他の同様な青銅貨幣の例から考えて、𠄎字貝貨は楚が国家として発行した統一貨幣と見なしてよいであろう。このことは、𠄎字貝貨が財富として周王朝の支配者間で贈与交換に使用されていた宝貝をモデルとした観念的創造物と考えられることから裏付けられる。𠄎字貝貨は財富としての宝貝からそのまま自然に転化してきたものではなく、ずっと後代になって、支配者である発行者の観点から選びとられたものだからである。

では、楚の支配者は、なぜ青銅貨幣のモデルとして宝貝を選んだのであろうか。秦では天円地方の観念により、魏では玉璧や玉環をモデルとした支配者側の観念の表れとして円銭が発行され、周や三晋諸国では実物貨幣である農具から転化し、燕、齊では削刀から転化した形の布銭や刀銭が発行された⁽⁷⁰⁾。楚以外の諸国は宝貝を貨幣のモデルとして採用することはなかったのである。楚国の宝貝形貨幣の採用について、趙德馨氏は中原諸国に対して弱小で経済力の低い楚国が、直接周代の貨幣文化の伝統を継承し小型で価値の低い貝貨を発行したと考えている⁽⁷¹⁾。趙氏は宝貝を貨幣とみなし、春秋後期に宝貝から楚貝貨への転化が起こったとする立場であるが、周との関係を指摘している点は注目される。

西周時代から春秋初期、楚は中原の遠く南方にあって、自ら蛮夷と称し中原諸国とは一線を画していた⁽⁷²⁾。春秋時代に入ると楚は北進を始め、周が封建した多くの中原諸国を滅ぼして支配下に置いていった。楚は蛮夷としての自覚から中原の周文化に対して強い関心を持ち続けたと考えてよいであろう。この楚の支配者の周に対する思いは、莊王の「鼎の大小軽重を問う」のエピソード⁽⁷³⁾に端的に表れている。これは、莊王が周に取って代わる意志を表示したものとされるが、あくまで周の体制を維持してそれを継承しようとしたものと思われる。𠄎字貝貨が楚によって周を継承する意図のもとに発行されたかどうかは定かでないが、周文化との関係で貨幣の形式として選り取られたことは確かであろう。なお、𠄎字系貝貨の文字はかなり多様であるが、𠄎字以外では𠄎字が安徽臨泉史庄村(表4番号83)から2,318点、𠄎字が肥西新倉郷(表4番号123、124)から200点以上出土しているのを除いて、微々たるものである⁽⁷⁴⁾。国家の鑄造工房の区別を示しているのか、あるいは民間鑄造なのか明らかでないが、𠄎字貝による楚貝貨の統一性は際立っている。

𠄎字貝貨以外の楚貝貨に関して、趙德馨氏は𠄎字貝貨について、春秋中葉かやや遅い時期の鄂北、豫南の楚国内の大封君の鑄造と考えている⁽⁷⁵⁾。表1によると、上述のように𠄎字貝貨の確かな出土が多いのは河南南部や安徽地域である。また、湖北出土の場合も河南南部や安徽に近い地域に片寄っている。この傾向は𠄎字貝貨以外のその他の楚貝貨でも認められる。𠄎字貝貨以外のその他の楚貝貨は、やはり楚が中原の陳に遷都した時期を中心に発行されたものであろう。しかし、その数量は極めて少なく𠄎字貝貨に対して補助的に発行されたものと考えられる。だが、

それらが大量の貨幣の需要に対して国家が発行したものか、民間が鑄造発行したものか現在のところ明らかにしたい。この問題は、この時期の楚国の貨幣発行体制全体の中で考えるべきであろう⁽⁷⁶⁾。

楚貝貨の関係で検討すべき問題として、郢爰など楚金版との関係がある。趙德馨氏は楚金版の出土分布図を作成しているが、その分布状況は楚貝貨の分布とよく似ている⁽⁷⁷⁾。河南南部、安徽、山東南部、江蘇に出土例が多いが、湖北や湖南はそれほどでもない。このように東遷前に国都があった湖北に出土が少ない点について、黄德馨氏は、楚に対する戦勝国が湖北から持ち出した可能性、東遷後に東方に運ばれた可能性、そして墓に副葬する習慣がなかったことを挙げ、東遷以前に楚金版が流通していなかったわけではないとしている⁽⁷⁸⁾。しかし、これによって、楚金版が湖北において長期にわたって大量に発行されつづけていたことが積極的に証明されるわけではない。楚金版の流通も楚貝貨と同様な状況にあったことも考えられ、両者は対応しながら流通していたとも考えられる。この点は、楚金版の分析を深めた後、再度検討すべきであろう。

注

- (1) 江村治樹「戦国時代尖足布・方足布の性格」(名古屋大学文学部研究論集・史学 49、2003)、「中国における古代青銅貨幣の生成と展開—刀銭と布銭のテキストとしての特性—」(統合テキスト科学研究 1-2、2003)、「中国における古代青銅貨幣の生成と展開(二)—円銭のテキストとしての特性—」(統合テキスト科学研究 2-2、2004)、「中国における古代青銅貨幣の生成と展開(三)—橋形方足布のテキストとしての特性—」(統合テキスト科学研究 3-2、2005)、「中国における古代青銅貨幣の生成と展開(四)—齊大刀のテキストとしての特性—」(統合テキスト科学研究 4-2、2006)。
- (2) 後述の𠄎字形のものを鬼臉銭と称し、有文銅貝全体を蟻鼻銭と称するのが一般的である。朱活氏によると、蟻鼻の語は古く晋葛洪『抱朴子』論仙に軽微の喩えとして見え、小銭のことであって、「一貝」二字の音転の可能性があるとしている(『古銭新探』齊魯書社、1984、頁 193「蟻鼻新解—兼談楚国地方性的布銭—“施錢当新”」)。また、馬昂『貨布文字攷』は𠄎の蟻形文字と鬼臉銭(𠄎)の倒置形の鼻の部分との二者を合称して俗に蟻鼻と称したとする。
- (3) 末尾の表 4「楚貝貨出土数量・寸法・重量表」によれば、122 安徽省肥西県新倉郷での埋蔵量は 1 万点以上、152 山東省曲阜県董大城村の埋蔵量は 15,978 点にも上る。また 190 江蘇省崑山県正儀郷では 200 kg、6 万点以上発見されたとされている。1 点の重さ 3.3 g は楚貝貨の一般的な重さであるので、6 万点という数字もあながちあり得ない数字とも言えないであろう。
- (4) 呂長礼、梅凌「安徽省肥西県新倉郷出土蟻鼻銭」(中国銭幣 1994-3) 頁 45、黄錫全『先秦貨幣通論』(紫金城出版社、2001) 頁 356。
- (5) 数 100 枚を 300 枚、数 10 枚を 30 枚、数枚を 3 枚、少数を 2 枚として計算した。なお、高煥文『癖泉臆説』は、B 字貝貨について、二十世紀初頭に「今河南広開鉄軌、挖得此種累千盈万」とあり、河南省で大量出土したとしているが、現在の出土状況から見て信憑性に欠けるため、本表には反映していない。
- (6) 趙德馨『楚国的貨幣』(湖北教育出版社、1996) 頁 221。
- (7) 注(2) 朱活書、頁 199「蟻鼻新解—兼談楚国地方性的布銭—“施錢当新”」。
- (8) 淑芬「湖北雲夢楚王城出土蟻鼻銭」(『銭幣研究文選』中国財政經濟出版社、1989)。
- (9) 郭若愚「談談先秦銭幣的幾個問題」(中国銭幣 1991-2)。
- (10) 尤徳仁「楚銅貝𠄎字积」(考古与文物 1981-1)。
- (11) 駢宇騫「布幣与蟻鼻銭」(歴史教学 1982-2)。

- (12) 李紹曾「試論楚幣－蟻鼻錢」(『楚文化研究論文集』中州書畫社、1983)、趙超「𠄎“𠄎”」(趙德馨氏によれば未刊稿で『錢幣研究文選』から転引)、張虎嬰『歷史的軌跡』(中国金融出版社、1987)。
- (13) 鄭家相『中国古代貨幣發展史』(三聯書店、1958)頁174、彭信威『中国貨幣史』(上海人民出版社、1958)頁56、汪慶正『中国歴代貨幣大系1 先秦貨幣』(上海人民出版社、1988)頁33、李家浩「試論戦国時期楚国の貨幣」(考古1973-3)頁192。
- (14) 江蘇省文物管理委員会「徐州高皇廟遺址清理報告」(考古学報1958-4)頁8、王克讓、蘇長軍、徐發祥「河南鎮平県館蔵の楚国蟻鼻錢」(華夏考古1995-2)頁78。
- (15) 陳衍麟「安徽繁昌揀選の楚銅貝范」(考古与文物1989-2)頁107、羅運環、楊楓「蟻鼻錢發微」(中国錢幣1997-1)頁8。
- (16) 馮耀堂「安徽臨泉出土大批楚国銅貝」(文物1985-6)頁88。
- (17) 黄錫全『先秦貨幣通論』(紫禁城出版社、2001)頁369。
- (18) 王献唐『中国古代貨幣通攷 上冊』(齊魯書社、1979)頁197、周世榮「貨幣帛書文字叢考」(古文字研究7、1982)頁176。
- (19) 劉志一「𠄎字新考」(江漢考古1992-3)頁79。
- (20) 陳隆文「楚蟻鼻錢面文𠄎字新釈－先秦貨幣地理研究之八」(華夏考古2006-4)頁93。
- (21) 注(6) 趙德馨書、頁224、225。
- (22) 注(7) 朱活書、頁198。
- (23) 黄錫全「楚幣新探」(中国錢幣1994-2)頁12、注(17) 黄錫全書、頁370。
- (24) 朱活編『中国錢幣大辞典・先秦編』(中華書局、1995)頁35、注(14) 王克讓等論文、頁78、羅運環、楊楓「蟻鼻錢發微」(中国錢幣1997-1)頁8。
- (25) 注(18) 王献唐書、頁197、奥平昌洪『東亞錢志』(歴史図書出版、1974)卷二、頁330、注(13) 彭信威書、頁56、汪慶正書、頁33。
- (26) 「𠄎」と解するのは注(17) 黄錫全書、頁370。注(6) 趙德馨書、頁219は「金」あるいは「𠄎」の省文としている。
- (27) 王毓銓『我国古代貨幣的起源和發展』(科学出版社、1957)頁92。
- (28) 方若『葉雨古化雜咏』記載の1例のみ確認。方若は「邦」と釈している。
- (29) 注(24) 羅運環等論文、頁8。
- (30) 注(17) 黄錫全書、頁370。朱活『古錢新譚』(山東大学出版社、1992)も「安」あるいは「𠄎」と呼んでいるが、何琳儀氏は𠄎字と𠄎字は区別すべきとしている(何琳儀『古幣叢考』(安徽大学出版社、2002)頁240)。
- (31) 𠄎字貝貨については陽鳳翔「前所未見の“陽”字蟻鼻錢」(文物2001-9)頁96、𠄎字貝貨については注(17) 黄錫全書、頁371。
- (32) 湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚簡』(文物出版社、1991)図版117。以下も同書参照。
- (33) 注(9) 郭若愚論文、頁61。
- (34) 注(6) 趙德馨書、頁27。
- (35) 張天恩「東周列国貝化的考察」(中国錢幣1991-2)頁32、注(9) 郭若愚論文、頁60、注(13) 李家浩論文、注(7) 朱活書、頁202、注(8) 淑芬論文、頁291、蕭清『中国古代貨幣史』(人民出版社、1984)頁45、51、舒之梅「楚国經濟發展脈絡」(江漢論壇1984-4)。
- (36) 注(6) 趙德馨書、頁13、頁28、頁233。
- (37) 注(13) 鄭家相書、頁87、173。
- (38) 注(13) 汪慶正書、頁33。
- (39) 汪昌橋、渭雄、呂長礼「楚銅貝合金成份的分析研究」(中国錢幣1995-2)頁8、汪昌橋、周衛榮、呂長礼「楚銅幣出土調査及其合金成份的分析研究」(『中国錢幣論文集』第三輯(1998)頁173。注(20) 陳隆文論文もこの説に従っている。
- (40) 魏航空、方勅「楚国貝幣思考」(中国錢幣1997-1)頁3。
- (41) 注(4) 黄錫全書、頁364。
- (42) 注(7) 朱活書、頁201。

- (43) 戦国諸国に年代は『史記』の内部でも矛盾が多い。原則として、『史記』六国年表にもとづく楊寬『戦国史』(上海人民出版社、1980)の附録三「戦国大事年表」によったが、問題のある部分は、平勢隆郎『新編 史記東周年表』(東京大学出版会、1995)の表Ⅱ「新六国年表」の年代を「平勢」として附記した。
- (44) 戦国中期に出現すると考えられる齊国貨幣・齊大刀は山東半島南部も含めて山東全域で広く流通している(注(1) 2006年江村論文、頁15、地図1)。
- (45) 太田麻衣子「鄂君啓節からみた楚の東漸」(東洋史研究 68-2、2009) 頁1。
- (46) 雲夢睡虎地出土「編年記」では「(昭王)十六年攻宛」とある。
- (47) 雲夢睡虎地出土「編年記」では、昭王29年に安陸を攻めたとなっており、この時、秦はさらに東して湖北雲夢県まで進出している。雲夢県あたりまで秦の南郡に含まれた可能性が高い。
- (48) 『史記』秦本紀には、昭襄王30年(平勢・楚頃襄王20年、前277年)に「蜀守若伐楚、取巫郡及江南為黔中郡」、31年に「楚人反我江南」とあり、長江以南の湖南が再び楚の領有になったことがわかる。
- (49) 注(1) 2005年江村論文、頁13。
- (50) 安徽出土の楚貝貨でも、山東鄒県出土のものに近い成分比のものが含まれている。臨泉県の4点、阜陽県の1点などは国都寿春時期のものであろう。
- (51) 江村治樹『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』(汲古書院、2000)、第二部。
- (52) 表3によれば安徽渦陽出土の1点は孝感出土のもの成分比に近く、早い時期の楚貝貨の流通力に広がりがあったことが分かる。
- (53) 柿沼陽平「殷周時代における宝貝文化とその「記憶」」(工藤元男、李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009) 頁6、池田等、淤見慶宏、広田行正『タカラガイ・ブック—日本のタカラガイ図鑑』(東京書籍、2007) 頁164、166。
- (54) 注(4) 黄錫全書、頁8、頁45表三。以下、宝貝の記述は多く本書によっている。
- (55) 注(13) 鄭家相書、頁12、彭信威書、頁12、注(27) 王毓銓書、頁10。
- (56) 注(2) 朱活書、頁7、頁9「古幣探源—試論我国古代貨幣的起源」。
- (57) 注(13) 汪慶正書、頁10。
- (58) 注(4) 黄錫全書、頁1「第一章 中国最早的貨幣—貝幣」。
- (59) 佐原康夫「貝貨小考」(奈良女子大学文学部年報 45、2001)。宮沢知之『中国錢幣の世界—錢貨から経済学へ』(思文閣出版、2007)もこれに賛同している。
- (60) 注(53) 柿沼陽平論文、頁16。
- (61) 注(13) 汪慶正書、頁11、注(4) 黄錫全書、頁24など。
- (62) 戴志強「安陽殷墟出土貝貨初探」(文物 1981-3) 頁72。戴氏は宝貝を貨幣と考え、第一段階の小孔式は宝貝が貴重な装飾品であった時期に始まり、実物貨幣になった初期にもなおこのようであったとし、第二段階の大孔式は流通の便のために穿鑿されたもので、宝貝の流通が盛んになった殷代での基本的な形態であったとする。そして、第三段階の背磨式は貨幣として軽量縮小した最も高級な段階であり、殷代晩期にはこの段階に入っていたとしている。
- (63) 注(13) 彭信威書、頁13。
- (64) 中国科学院考古研究所『澧西發掘報告』(文物出版社、1962) 頁128、154。
- (65) 王国維「説珽朋」(『觀堂集林』卷三、藝林三)。
- (66) 注(53) 柿沼陽平論文、頁32、附表1。
- (67) 河南省文物研究所等『浙川下寺春秋楚墓』(文物出版社、1991) 頁203。
- (68) 和尚嶺1号墓から160点、2号墓から15点、徐家嶺9号墓から6点の宝貝が出土しているが、みな「一面加工磨平」となっており模写図も明らかに背磨式である(河南省文物考古研究所等『浙川和尚嶺与徐家嶺楚墓』[大象出版社、2006] 頁21、114、214)。
- (69) 彭柯、朱岩石「中国古代所用海貝来源新探」(考古学集刊 12、1999) 頁124、図2、注(53) 柿沼陽平論文、頁8、図4。
- (70) 注(1) 江村論文参照。
- (71) 注(6) 趙德馨書、頁29。

- (72) 『史記』楚世家に、「熊渠曰、我蛮夷也。不與中国之号諡」とあり、また楚武王の時、「楚伐隨。隨曰、我無罪。楚曰、我蛮夷也。今諸侯皆為叛相侵、或相殺。我有敝甲、欲以觀中国之政、請王室尊吾号」とある。
- (73) 『左氏伝』宣公3年。
- (74) 史庄村出土の𠄎字系貝貨のうち𠄎字が34点に対して𠄎字がほとんどを占める。𠄎、𠄎、𠄎字貝貨の除いた他の𠄎字系貝貨とされるものの数量は無視してよいほど少数である。
- (75) 注(6) 趙徳馨書、頁232。
- (76) 戦国楚国の青銅貨幣としては、楚貝貨の他に、大型の布錢(施錢当銜、殊布当銜、梘比當銜)や銅錢牌などがあるが、その性格については多くの議論がある。
- (77) 注(6) 趙徳馨書、頁148「図4-1 楚国金幣流通地域示意图」。
- (78) 黄徳馨「湖北出土の爰金為什麼這樣少」(中国錢幣1996-2) 頁33。

図版・表出所目録

図1 楚貝貨の種類

①②著者蔵、③④中国錢幣1990-3、⑤『信陽駐馬店錢幣發現与研究』頁271 図四、⑥著者蔵、⑦⑧考古1991-1 図八2、8、⑨⑩黄錫全『先秦貨幣通論』、頁369 図一二二、⑪中国錢幣1994-3、⑫文物2001-9、頁96 図一

図2 宝貝の背面加工(大孔式、背磨式)

①『安陽鶴壁錢幣發現与研究』彩版貳(殷代)、②著者蔵(内蒙古赤峰出土?)

図3 現代の宝貝装飾品(東南アジア?) 著者蔵

図4 金文の「朋」字関係字

①『三代吉金文存』卷6・46、②同左卷16・17

表1: 表4から集計。

表2: 表4から集計。

表3: 周栄衛『中国古代錢幣合金成分研究』(中華書局、2004) 頁24、表2213「蟻鼻錢的合金成分」による。

表4 楚貝貨数量・寸法・重量表

	㝱字系			㝱字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
1 湖北 荊州・紀南城								不明
2 荊州 鄧城鎮 M40	㝱 6	2-1.15	3.7-2.3					6
3 荊門 岳飛城 M3	㝱1							1
4 宜城 楚皇城	㝱1	1.85	1.9					1
5 宜城 郭家崗探溝	㝱1	厚 0.4						1
6 孝感 野猪湖窖藏	4745	2-1.3	5.4-3.5					4745
7 (孝感) *成分分析	(㝱5)		5-4					(5)
8 雲夢 楚王城四層	17	2.2-1.6	4.42-1.59	14	1.95-1.62	2.45-0.96	㝱1(1.6g) 無文1(0.96g)	33
9 雲夢 楚王城五層	16	1.95-1.7	3.67-1.67	1	1.95	2.45		17
10 雲夢 楚王城探溝	㝱 不明	極薄						不明
11 応山 王子山				1		3.37		1
12 大悟 呂王城 T2	㝱1							1
13 大悟 呂王城 T5								不明
14 黄岡 禹王城窖藏	㝱431-							431-
15 黄岡 汪家冲 M21	㝱9	2						9
16 大冶 金牛鎮窖藏	㝱4		(7-4.2)	1		(7-4.2)		5
17 (武漢废品 倉庫)	(㝱33)			(15)			(㝱1, 無文 1)	(50)
18 湖南 長沙・伍家庄 M272 楚墓	㝱3	1.8-1 残	1.23-0.61 残					3
19 長沙 小林子冲 M14	2			(不明)				2
20 長沙 大冬瓜山 M 8	100 余	(1.8)	(2.6)	(不明)			(㝱, 㝱)	100 余
21 長沙 東塘農學院 M6	5	(1.8)	(2.6)					5
22 長沙 東塘 M8	㝱10 余							10 余

	罍字系			罍字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
23 長沙 燕山 M8	罍11							11
24 常德 德山 M47, M50	罍199	1.6		(不明)				199
25 常德 德山 M5	189			(不明)				189
26 常德 德山棉織廠 M7	145			(不明)				145
27 常德 德山 M2	罍2							2
28 臨澧 九里 M3								2(3-2.3cm) 種不明
29 郴州 飛工 M1	罍2	1.8	1					2
30 郴州 上鉄 M12	罍2							2
31 河南 西峡・五里橋	(罍 罍 1298)	1.8-1.45	3.9-0.75				無文 2	(1298)
32 (鎮平か隣 県)	(罍 137)	1.99-1.26	4.25-0.6	7	2.02-1.71	3.2-1.7	罍 2(1.82- 1.7/2.1-1.1) 罍 1(1.6/1) 人面 1(1.36 /2.5)	(148)
33 南陽 建東小区								22(1.92- 1.58/1.7) 種不明
34 信陽 楚王城								不明
35 信陽 長台関							罍 (合背) 不明	不明
36 (信陽)	罍11,罍不明			2				不明
37 息県 包信	罍10							10
38 (息県)	罍不明	-1.8-	-3.1-					不明
39 潢川 黄国故城								不明
40 潢川 唾吧園孜	罍30-							30-
41(固始一帯)	罍4700- (罍 7000-)		2-1.1	400-			罍 3 (1.7- 1.3g) 罍 37 (2.2- 1.2g) 罍 1 (4.25g)	5100-
42 固始 翁棚遺址								不明
43 固始 頼尚遺址								不明

	咒字系			夔字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
44 固始 三河尖	咒 不明							不明
45 固始 三仙庄								400- 種不明
45 固始 李店郷								20-kg 種不明
46 固始 番国故城								500- 種不明
47(固始)	咒 咒						全, 杯, 兪, 罍, 匜	不明
48(固始採集)	咒 50-		4-2.2					50-
49 淮浜 期思里古城	咒 ? 不明	(1.8-1.4)	(3.1-1.4)					不明
50 淮浜 期思	咒 不明						咒 不明	不明
51 淮浜 馬崗遺址								不明
52 新蔡 新蔡故城	咒 不明		(2.8-1.5)	不明		(0.7-0.5)	半 (0.42g) 両 (0.6g)	不明
53 平輿 沈国故城	咒 咒 不明	(-2.01-)	(-3.1-)	不明	(-1.99-)	(-3.1-)	全 (1.5g) 杯 (4.8-3.4g) 兪 (3.2-3g) 罍 (1.7g)	不明
54 平輿 后崗遺址								不明
55 上蔡 蔡国故城	咒 300-							300-
56 上蔡 澗溝王村楚墓								不明
57 上蔡 郭村冶鉄遺址								不明
58 商水 扶蘇城外								不明
59 商水 頓国故城								不明
60 淮陽 金楼村	咒 270, 咒 23	1.9-1.6	(3.8-2.2)	3	2-1.9	(3.8-2.2)	V 式 1	297
61 淮陽 馬鞍冢楚墓	咒 53		-0.1					53
62 淮陽 平糧台 M79	咒 不明							不明
63 淮陽 平糧台 M4								1 種不明
64 淮陽 平糧台小型楚 墓								不明

	罍字系			罍字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
65 淮陽 陳楚故城								不明
66 太康 玉皇閣								210(4.1/7-) 種不明
67 (鄆城)	不明							不明
68 舞陽 北舞渡古城				1				1
69 舞陽 七里崗	罍1	2						1
70 魯山 西肖楼遺址								不明
71 汝州城北				(169)	(1.9)	(3.1)		(169)
72 (汝州採集)	(300-)							(300-)
73 (宜陽)				不明				不明
74 三門峽 上村嶺墓	罍 数枚							数枚
75 安徽 亳縣・城父							罍8(4.1g) 罍1(1.75/ 2.1)	9
76 亳州 墓葬							罍7	7
77 渦陽 盛方楼窖藏	罍 25 罍1		5.6-					26
78 渦陽 盛双楼西窖藏	罍4	2-1.8						4
79 渦陽 丹城								不明
80 (渦陽)	罍13							13
81 宿県 蕪県集古城								不明
82 太和	2000-							2000-
83 臨泉 史庄村城址	罍2318, 罍 34, 罍 2, 罍1	3.1-1.7	3.6-1.4					3000-
84 臨泉 老邱堆採集	罍10			1				11
85 (臨泉收購)	罍110			少数				不明
86 (臨泉 1)	罍200-						罍 1	200-
87 (臨泉 2)	罍30							30
88 (臨泉 3)							罍 1	1
89 (臨泉) *成分分析	(罍 1, 罍 20)	(2.03-1.6)	(3.44-1.19)	(1)	(1.4)	(0.5)		(22)
90 (阜南)				不明	2-1.5	3-2.8		(12)
91 阜陽 界首	罍罍 数 100							数 100

	𧇧字系			𧇧字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
92 (阜陽) *成分分析	(𧇧10)	2-1.2	2.94-1.0				𧇧1(1.8/2.5) 無文 1(3g)	(12)
93 阜陽 插花区	𧇧 銀 1 残	1.7	2.2					銀 1
94 阜陽 一遺址							𧇧 数枚	数枚
95 利辛 苞河沿岸	𧇧10-			6				16-
96 潁上 湯圩	𧇧 数 10							数 10
97 潁上 1	𧇧30							30
98 潁上 2	𧇧80-							80-
99 寿県 九里溝	2	2.1	3.18					2
100 寿県 堰口集 1	𧇧300-							300-
101 寿県 堰口集 2	𧇧 数 100							数 100
102 寿県 瓦埠湖	𧇧3000-							3000-
103 寿県 安豊塘	𧇧200-							200-
104 寿県 1	𧇧3000-			10				3010-
105 寿県 2								120-130 (3.75g) 種不明
106 淮南 唐山郷等								不明
107 淮南	𧇧300-							300-
108 懷遠 古城	𧇧100-							100-
109 懷遠 孝信郷等	𧇧 数 100 𧇧銅范 2							数 100 銅范 2
110 (蚌埠収購 1)	1000-							1000-
111 (蚌埠収購 2)	𧇧 不明							20kg
112 鳳陽 霸王城 1	𧇧 数 10							数 10
113 鳳陽 霸王城 2	𧇧30-							30-
114 (鳳陽臨淮 関収購)	不明							35kg
115 固鎮 濠城郷	𧇧3856		5.65-1.06					3856

	罍字系			罍字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
116 固鎮 新馬橋	罍100-							100-
117 固鎮 垓下遺址	罍 数枚							数枚
118 固鎮 *成分分析	罍 数 100	(1.8-1.6)	(2.2-1.9)					数 100
119 六安 西古城 1	罍 数 100							数 100
120 六安 西古城 2	罍2000-							2000-
121 六安	罍 罍 罍 若干			若干 残銅范 1			若干	若干 残銅范 1
122 肥西 新倉鄉窖藏	罍 罍 10000-	-2.1-	-2.6-	2	-1.98-	-3-	罍 1(-1.8/-2-)	10000-
123 肥西 新倉鄉樂河遺址	罍 20, 罍 1400, 罍 8, 罍 200	-2.1~1.75-	-2.6~1.75-	18	-1.98-	-3-	罍 3(-2.1/-4-) 罍 9(-1.8/-2-) 罍 15(-1.9/-2.5-)	2000-
124 肥西 新倉鄉豐樂河	罍 400-, 罍 1, 罍 1, 罍 35			4			罍 5, 罍 1, 樂 5	453-
125 肥西 新倉鄉豐樂河 北岸	罍 9240, 罍 1			1				9242
126 (肥西) *成分分析	罍 罍 罍 罍 (35)	1.8-1.6	3.49-2.16	(2)	2.05-2	3.45-1.32	罍 1(1.8/1.6) 罍 1(1.4/1.5) 罍 1(1.6-1.5)	(40)
127 合肥 漢城遺址	罍 1							1
128 合肥 西角漢墓								1 種不明
129 巢湖 黃山鄉	罍 5000-							5000-
130 巢湖 汽車站	罍 80-							80-
131 巢湖 廟集	罍 200-							200-
132 巢湖	1000-							1000-
133 全椒 城東鄉	罍 数 10							数 10
134 全椒	罍 1000-							1000-
135 天長 北岡漢墓								1 種不明
136 繁昌 三山鎮	罍 52		4-1.5					52
137 (繁昌橫山 鎮?)	罍 銅范 2							銅范 2
138 (繁昌) *成分分析	(罍 13)	1.64-1.31	1.54-0.52					(13)

	𠄎字系			𠄎字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
139 広徳 誓節郷窖蔵	𠄎1159	1.8	-2.72-0.8					1159
140 山東 棗庄・薛城	𠄎 不明							不明
141 棗庄 渴口鎮 M118	1	1.7						1
142 蒼山 蘭陵	(𠄎3)							(3)
143 郟城 郟国故城								不明
144 臨沂 西義堂郷	𠄎 数枚	(1.6)	(3.1)					数枚
145 臨沂	𠄎3000-							3000-
146 滕県 木石公社	𠄎527							527
147 滕県 滕国故城								不明
148 鄒県 邾国故城	(𠄎2)						無文 (1)	(3)
149 (鄒県) *成文分析	(𠄎4)	(2.0-1.5)	(2.0-1.5)					(4)
150 曲阜 魯故城	8							8
151 曲阜 魯故城周公廟	少数							少数
152 曲阜 董大城村窖蔵	𠄎 𠄎 他 15978	1.85-1.2	4.2-0.6					15978
153 曲阜 董大城村東	8	1.46-1.1	2.7-0.5					8
154 泗水 官元村	𠄎95		3.8-1.5					95
155 (莒県)	不明							不明
156 莒南 西鉄溝崖村	𠄎109?		3.8-3.1					109?
157 (莒南)	不明	1.65	3.8					不明
158 日照	𠄎 少数							少数
159 江蘇 徐州・高皇廟	𠄎2		3.18					2
160 徐州 鷄山	𠄎 少数							少数
161 徐州 十戸山	𠄎 少数							少数
162 徐州 洞山村								少数
163 徐州 昆山	𠄎 少数							少数

	罍字系			罍字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
164 徐州 塩城地区								少数
165 邳県 南灘子	罍 成堆							成堆
166 邳県 竹園村	多数							多数
167 東海 焦庄遺址	6							6
168 連雲港 九竜口								不明
169 宿遷 清涼院遺址	罍30							30
170 宿遷 青城遺址	罍7							7
171 泗洪 巨声村窖藏	罍3759-	2.1-1 (1.8-1)	5-0.3 (1.8-0.3)					3759-
172 泗洪 張郎咀	罍20							20
173 泗洪 鍋底湖遺址	罍3							3
174 淮陰 石庄	罍1							1
175 射陽								不明
176 塩城 麻瓦墳遺址								不明
177 洪沢 塘埂遺址	罍罍 2							2
178 盱眙 王店郷	罍3							3
179 盱眙 観音寺郷	罍500							500
180 盱眙 十里宮郷	罍4500							4500
181 盱眙 東陽古城	罍400							400
182 金湖 黎城遺址	罍10							10
183 揚州 邗城								不明
184 揚州 郊区胡場墓								不明
185 儀徵 甘草山遺址	罍42	2-1.5	4-2.3					42
186 南京 師古灘								数 1000 種不明
187 (高淳淳溪 鎮収購)	(罍 311, 罍 1)	1.6-1.2						(312)













	罌字系			桑字			その他 (cm/g)	数量計 (cm/g)
	数量	寸法cm	重量 g	数量	寸法cm	重量 g		
188 宜興 南新公社	2							2
189 蘇州 靈岩山	不明							不明
190 昆山 正儀郷	罌60000-							60000-
191 (昆山採集)	罌11		2.8-0.75					11
192 浙江 湖州・城区	罌600-500		2.8-1.4					600-500
193 仙居 湫山郷								16種不明
194 陝西 咸陽・長陵車站	罌罌73	2-1.3	4.1-0.6	48	2.1-1.6	3.6-1	罌1(1.9/1.4) 無文2(1.8- 1.7/2.7-2.5)	124
195 内蒙古 額濟納旗	罌3銅范?	2.1	3.5					3 銅范?

表4 楚貝貨出土地出典一覧

湖北

- 1 荊州紀南城：『中国文物地図集 湖北分冊』下 p 142 (荊州区紀南鎮南楚紀南故城周囲で鄧爰、蟻鼻錢)
- 2 荊州鄧城鎮 M40：江漢考古 2007 - 4 p 19 (2002年6月～04年10月、鄧城鎮黃山村と澎湖村境内庶民楚墓M40 (戦国中期)・陶壺、銅砧碼4 (有銘)、天秤盤、  蟻鼻錢6)
- 3 荊門岳飛城 M3：中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 (文物 1965 - 12) (1962年漢墓M3・ 字貝1枚) / 文物 1965 - 12、p 62 (武漢晚報 1963年1月16日)
- 4 宜城楚皇城：考古 1965 - 8、p 380 図七 (1962年4月楚皇城遺址、陶罐戰中窖藏・ 字蟻鼻錢1、半兩400余斤、黃金大金粒、金子) / 『古錢新探』 p 195 表 / 江漢考古 1985 - 2 p 68 (鄧故城 (楚皇城) 東北部の高坡 (散金坡、晒金坡) で鄧爰出土、東周遺物城内外で出土 (銅器、帶鈎、車馬具、蟻鼻錢、銅鏃))
- 5 宜城郭家崗：考古學報 1996 - 4、p 515 (1990年9月～12月、宜城市西南7km郭家崗遺址・周代遺址、房址、灰坑 97、井7、石工具、鉄農具、銅削刀5、帶鈎、陶器、陶文「王」字、 字貝1 (北区 T2))
- 6 孝感野猪湖：文物 1965 - 12、p 62 (1963年12月、祝站区野猪湖南部陶罐内窖藏・蟻鼻錢5000枚前後 (20.5kg, 4745枚整理)、銅弩牙2、三稜銅鏃2、獸飾銅轄、銅劍劍身殘片2と13片の銅器小殘片同出 / 考古 1964 - 4、p 369 (孝感) * 成文分析：中国錢幣 1995 - 2、p 8 (孝感・ 5枚)
- 8 雲夢楚王城・四層：『先秦貨幣通論』 p 357 表三〇 (楊煦春主編『錢幣研究文選』 p 284)、表三三 (1987年東周文化層第四層 [春秋末～戰国早中期]・無文貝1、 系貝17、 貝14、 貝1) / 考古 1991 - 1、p 13 (1984年城址文化層遺物：西周 (陶器)、東周 (陶器、筒瓦、蟻鼻錢：無文錢、有文錢6種)、秦漢 (陶器、雲紋瓦當))
- 9 雲夢楚王城・五層：『先秦貨幣通論』 p 357 表三〇 (楊煦春主編『錢幣研究文選』 p 284)、表三三 (1987年東周文化層第五層 [戰国中晚期]・ 系貝16、 貝1) / 考古 1991 - 1、p 13 (1984年城址文化層遺物：西周 (陶器)、東周 (陶器、筒瓦、蟻鼻錢：無文錢、有文錢6種)、秦漢 (陶器、雲紋瓦當))
- 10 雲夢楚王城探溝：文物 1994 - 4、p 42 (1992年6月、楚王城西壁剖面探溝・楚王城城垣底下に漢代灰坑7カ所、陶器、銅器 (鏃、帶鈎、 字蟻鼻錢)、鉄器)
- 11 応山王子山：『楚国的貨幣』 p 224 (王子山・ 字貝1枚)
- 12 大悟呂王城 T2：江漢考古 1985 - 3、p 5 (1982年2 - 4月、県城東70km呂王鎮呂王城遺址 T 2・ 字蟻鼻錢1)
- 13 大悟呂王城 T5：江漢考古 1990 - 2、p 32 (1979 - 82年呂王城遺址 T 5・紅燒土、陶片、鉄斧、銅鏃、帶鈎、蟻鼻錢 (第二層)、木炭渣、陶片 (第三～五層))
- 14 黄冈禹王城・窖藏：考古 1984 - 12、p 1095 (1981年3月15日、禹王城西南角土台上小陶罐窖藏： 銅蟻鼻錢431余 (麻布痕跡あり)、銅圓錢3 (方孔、銘文不明)、銅箭鏃16)
- 15 黄冈汪家冲 M21：考古學報 2001 - 2、p 227 (禹王城南汪家冲墓地 WM21 (戰国晚期)・陶礼器、銅矛、 蟻鼻錢9) / 考古學報 2001 - 2、p 227 (1992年3 - 5月、禹王城南楚墓 (春秋中期～戰国晚期、曹家崗・竜王山・王家冲墓地)・蟻鼻錢8)
- 16 大冶金牛鎮窖藏：江漢考古 1989 - 3、p 18 (1982年5月、金牛鎮黄泥大隊竹林柯自然村一陶罐 (戰国晚期) 窖藏・良金四朱、良金一朱、 字貝4、 字貝1、銅車馬器、工具、兵器) / 『先秦貨幣通論』 p 357 表三〇
- 17 (武漢市廢品倉庫)：中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 (中国錢幣 1985 - 2、朱活『古錢統談』) (1974年武漢市文物商店廢品倉庫発見 (春秋末～戰国早期遺址)・ 33枚、 15枚、 1枚、無文貝1枚)

湖南

- 18 長沙伍家庄 M272：『長沙発掘報告』 (1951年伍家庄戰国楚墓 M272・ 蟻鼻錢殘片3)
- 19 長沙小林子冲 M14：考古通訊 1958 - 12、p 29 (1957年8月南門外小林子冲盲人院工地戰国墓 M14・陶器、銅劍、鏡、花料珠1粒、銅蟻鼻錢2枚 (墓室中間) / 『古錢新探』 p 195、p 196 表 (1957年南門外、小林子冲盲哑学校・M14 (戰国墓)： 字系貝2枚、銅鏡、料珠、陶器) / 『先秦貨幣通論』 p 357 表三〇 (考古通訊 1958 - 12) (1957年南門外、小林子冲 M14 楚墓・ 字系貝2枚) / ? 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (1957年8月南門外小林子冲楚墓 M14・ 字貝120枚)
- 20 長沙大冬瓜山 M8：『古錢新探』 p 196 表 (1954年南門外大冬瓜山戰国墓 M8・ 字系貝100余枚、銅鏡、劍、天平法碼、銅礼器、陶器) / ? 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (考古 1958 - 12) (1954年南門外大冬瓜戰国墓 M8・ 5枚、 1枚、 貝1)
- 21 長沙東塘農學院 M6：『古錢新探』 p 196 表 (1954年南門外東塘農學院戰国墓 M6・ 字系貝5枚、銅鏡、法碼、銅勺、陶器) / 『先秦貨幣通論』 p 357 表三〇 (朱活『古錢新典』上 p 19) (1953年東塘農學院 M6 楚墓・ 字系貝5枚)
- 22 長沙東塘 M8：『我国古代貨幣の起源と發展』 p 93 (1954年南郊東塘戰国墓 (編号 54、長東 M008)・銅鏡附近に 蟻鼻錢10余枚放置) / ? 『湖南省文物図録』 p 1.35 - 1 (1953年東塘 M8・ 字貝4枚)

- 23 長沙燕山嶺 M8:『古銭新探』p 196 表(1958年東門外燕山嶺、戦国墓M8・𠄎字系貝11枚、銅鏡、陶器)
- 24 常德德山 M47, M50: 考古1963-9, p 461(1958年10月徳山鎮晩期墓M47, M50(戦国後期~秦楚の際)・銅蟻鼻錢計199枚(頭箱竹筐内) / 『先秦貨幣通論』p 357 表三〇(考古1963-9)(1958年、徳山鎮、M47, M50・𠄎字系貝199) / 『中国歴代貨幣大系1』p 33, p 1151 先秦鑄幣出土簡況表(考古1963-9)(1958年徳山棉紡廠楚墓M5、楚国晩期墓M47, M50・楚銅貝約200枚𠄎系𠄎)
- 25 常德德山 M5: 文物1960-3, p 34(1958年徳山鎮楚墓M5・蟻鼻錢189個) / 『先秦貨幣通論』p 357 表三〇(朱活『古銭新典』上p 19)(1958年徳山鎮、M5・𠄎字系貝189) / 『中国錢幣論文集・第三輯(1998)』p 173、表一(文物1960-3)(1958年10月徳山鎮戦国墓M5・𠄎、𠄎字貝189枚、戦国墓M7: 𠄎、𠄎字貝145枚)
- 26 常德徳山棉織廠 M7: 『古銭新探』p 196 表(1958年徳山棉織廠戦国墓M7・𠄎字系貝145枚、銅鏡、戈、料珠、陶器) / 『先秦貨幣通論』p 357 表三〇(朱活『古銭新典』上p 19)(1958年徳山鎮M7・𠄎字系貝145) / 『中国錢幣論文集・第三輯(1998)』p 173、表一(文物1960-3)(1958年10月徳山鎮戦国墓M5・𠄎、𠄎字貝189枚、戦国墓M7: 𠄎、𠄎字貝145枚)
- 27 常德徳山 M2: 『湖南省文物図録』p 1.35-2(1958年徳山M2・𠄎蟻鼻錢2枚)
- 28 臨澧九里 M3: 中原文物1991-4, p 39(河南考古輯刊1986-3)(九里M3・蟻鼻錢2枚)
- 29 郴州飛工 M1: 中国錢幣1995-2, p 56(1993年郴州地区戦国中期偏晩墓(93郴州飛工M1)墓底頭部・𠄎蟻鼻錢2枚、陶礼器、四山紋銅鏡、銅簪)
- 30 郴州上鉄 M12: 中国錢幣1995-2, p 56(1994年郴州地区戦国中期偏晩墓葬(94郴州上鉄M12)・𠄎蟻鼻錢2枚(墓底)、陶盆残片)
- 河南
- 31 西峡五里橋: 中原文物1986-1, p 87(1961年夏城西北3km五里橋公社方店大隊槐樹村南丁河北岸窖藏、発見時南陽博物館が5kg(総数の一半)調走、文革中に一部失う、西峡県文化館1298枚、2.6kg臧(I型最多、II型、III型最少、他に無文字2) / 『南陽平頂山錢幣發現与研究』p 34(1961年春五里橋公社方店大隊槐樹灣村南丁河北岸、戦国一陶罐窖藏10余kg・𠄎𠄎、𠄎合背、南陽市博物館、西峡県文管館(文革時部分亡失))
- 32 (鎮平か隣県): 夏華考古1995-2, p 78(1985年2月11日鎮平県公安局計191枚蟻鼻錢繳獲、150枚整理、出土地点不詳、錆色一致、同坑出土の可能性、𠄎字137、𠄎字7、君字2、兩字1、人面1、銖字1、石𠄎字1) / 『南陽平頂山錢幣發現与研究』p 34(出土地不詳、鎮平県館藏、1985年2月鎮平県公安局没収)
- 33 南陽建東小区: 『南陽平頂山錢幣發現与研究』p 35(包明軍「河南南陽出土銅、骨、貝幣」中州錢幣5期)(1992年7月建東小区工地・戦国瓦礫坑: 蟻鼻錢22枚)
- 34 信陽楚王城: 中原文物1983特刊, p 54(1921年長台関公社蘇樓大隊西部楚王城遺址・戦国銅器、瓦當、陶片、蟻鼻錢、郢爰1塊25g、銅鏃出土(『統修信陽県志』))
- 35 信陽長台関: 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 37 蟻鼻錢出土一覽表(君字合背貝、枚数不詳) / 『中国錢幣大辞典・先秦編』p 34(1963以来陝西咸陽、河南信陽等出土・𠄎字貝)
- 36 (信陽): 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 37 蟻鼻錢出土一覽表(1987年、𠄎字貝11、各六朱2枚)
- 37 息県包信: 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 37(1986年、𠄎字貝10枚)
- 38 息県: 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 37 蟻鼻錢出土一覽表
- 39 潢川黄国故城: 中原文物1986-1, p 54(潢川県西6km隆古郷黄国故城・周辺遺物豊富、陶片、銅鏃、蟻鼻錢)
- 40 潢川啞吧園孜: 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 37 蟻鼻錢出土一覽表(1985年、𠄎字貝30余)
- 41 (固始一帶): 中国錢幣1990-3, p 66(1987年夏固始県農村丘陵地帯(戦国は期思、楚相孫叔敖の出身地)、暴雨時表土流失、錢幣星散、農民拾い上海に流入、計5100余、7品種: 𠄎4700枚前後(大多数2-1.1g、合背型13枚、空腹空背型7枚)、𠄎400枚前後、君字37枚(6枚重量: 2.2, 2, 1.9, 1.7, 1.4, 1.2g)、金字3枚、1.7, 1.3g、他碎損)、忻字1枚(4.25g) / 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 37 蟻鼻錢出土一覽表(中国錢幣)(1980年代、𠄎字貝7000余枚)
- 42 固始翁棚遺址: 『中国文物地図集 河南分冊』p 520、地図218-219(三河尖郷翁棚遺址(春秋戦国)・24万㎡、陶片、楚国貝幣(蟻鼻錢?)、漢代銅鏡)
- 43 固始頼崗遺址: 『中国文物地図集 河南分冊』p 520、地図218-219(陳集郷椀杆村頼崗遺址(春秋戦国)・9300㎡、石器、陶片、楚蟻鼻錢、漢代銅洗)
- 44 固始三河尖: 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 37 蟻鼻錢出土一覽表(1983年、𠄎字貝不詳)
- 45 固始李店郷: 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 35(1992年、銅貝20余kg)
- 46 固始番国故城: 『信陽駐馬店錢幣發現与研究』p 35(1996年、銅貝500余枚)
- 47 (固始): 『中国古代貨幣發展史』(𠄎字貝・固始県出土) / 『古銭新探』p 198 / 文物1959-3, p 65 (𠄎字貝・河南

- 陽歴史演變」中州錢幣論叢(1984年城北七里崗・𠄎字系貝1)
- 70 魯山西肖樓遺址：『中国文物地図集 河南分冊』p 90、地図 88 - 89 (張店郷西肖樓遺址(戦国)・2万㎡、下層竜山石器、陶片、上層戦国陶器、蟻鼻錢)
- 71 汝州城北：『南陽平頂山錢幣發現与研究』p 377 図 10 (汝州市汝瓷博物館蔵 169 枚、汝州市城北農民発見𠄎字貝 169 枚? (他県区発見少量))
- 72 (汝州採集)：『先秦貨幣通論』p 358 表三〇(張堯成「平頂山建市以来錢幣出土發現簡述」中州錢幣論叢(1975年臨汝県文管会採集・𠄎字系貝 300 余、0.5 k g 余)
- 73 (宜陽)：『中国錢幣大辞典・先秦編』p 35 (宜陽県・𠄎字貝)
- 74 三門峡上村嶺墓：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(中原文物 1981 特刊、黄土斌)(上村嶺戦国墓・𠄎字貝数枚)
- 安徽**
- 75 亳县城父：『先秦貨幣通論』p 360 表三〇(『安徽錢幣文論特輯』第 2 輯、p 158)(1979 年城父・𠄎貝 8、三貝 1)
- 76 亳州墓葬：中国錢幣 1994 - 3、p 46 (亳州市博物館による墓葬発掘中出土・𠄎字貝 7 枚)
- 77 渦陽盛方樓・窖藏：『先秦貨幣通論』p 360 表三〇(安徽金融研究 1987 年増刊 1 期)(1985 年 5 月胡檢郷盛方樓村一罐・𠄎字系貝 25 枚(大型貝は背凹形、空殻状、字に異形あり) / 中国錢幣 1994 - 3、p 12 (王本初「安徽近年出土楚銅貝初探」文物研究・総第二期、1986.12)(1985 年双廟区胡檢郷盛方樓村・𠄎字貝 25 枚、一は𠄎(安徽出土最大 5.6 g)、余は𠄎、一部に凹形空殻状)
- 78 渦陽盛双樓西・窖藏：考古 2006 - 9、p 792 (1984 年 10 月双廟区盛双樓村西、地下 90 c m、縄文紅陶罐内蔵(132 件の青銅原料回収)・農具 81 件、工具 12 件、兵器 22 件、雜器 15 件(𠄎蟻鼻錢 4 枚含む)、他に銅器残片多数)
- 79 渦陽丹城：中国錢幣 1990 - 2、p 71 (『舟山錢幣』1989 年 4 期、所引)(1971 年丹城・銅貝幣、(阜陽地区 9 県 2 市歴年来零星な銅貝出土))
- 80 (渦陽)：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157)(1984 年出土・𠄎字貝 10 枚(大型 3 枚)) / 『先秦貨幣通論』p 360 表三〇(『安徽錢幣文論特輯』第 2 輯、p 157)(1984 年渦陽県・𠄎字系貝 13 (大型 3、普通 10))
- 81 宿県蕪集古城：文物 1978 - 8、p 6 (宿城から 22 k m 滄河北岸蕪集古城址内・楚国金幣(郢爰)、蟻鼻錢、戦国漢代陶片)
- 82 太和：『先秦貨幣通論』p 360 表三〇(『安徽錢幣文論特輯』第 2 輯、p 157)(1990 年太和県𠄎字系貝 2000 余枚)
- 83 臨泉史庄村城址：中原文物 1985 - 1、p 97 (1983 年 6 月 10 日崔寨郷史庄村東一罐内、3000 枚前後群衆に分散、2455 枚、6 k g 収集・一貝𠄎 2318 枚(最大 418、最小 780、一般 1120)、𠄎 34 枚(最大 11、最小 6、一般 17)、𠄎 2 枚、𠄎 1 枚) / 文物 1985 - 6、p 88 / 考古与文物 1985 - 2、p 112
- 84 臨泉老邱堆採集：『古銭新探』p 196 表(1956 年老邱堆宋集・𠄎字系貝 10 枚、𠄎字貝 1 枚採集) / 中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(朱活『古銭新探』(1956 年老邱堆宋集・𠄎字貝 10 枚、𠄎字貝 1 枚))
- 85 (臨泉收購)：中国錢幣 1990 - 2、p 71 (舟山錢幣 1989 年 4 期、所引)(1971 年、臨泉県收購站揀選：𠄎 110 枚、𠄎少量、(阜陽地区 9 県 2 市歴年来零星な銅貝出土))
- 86 (臨泉 1)：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(錢幣文論特輯・第 2 期 p 157)(1989 年臨泉県・𠄎字貝 200 余枚、𠄎字貝 1 枚)
- 87 (臨泉 2)：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157)(1988 年臨泉県・𠄎字貝 30 枚)
- 88 (臨泉 3)：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(安徽金融研究 1988 年増刊 2 期)(1987 年 5 月臨泉県・𠄎字貝 1 枚(無穿孔))
- 89 (臨泉) * 成分分析：『中国古代錢幣合金成文研究』p 26、3 蟻鼻錢 Y B 70 - 91、p 164 (臨泉県：𠄎 1、𠄎 20、𠄎 1)
- 90 (阜南)：『中国古代錢幣合金成文研究』p 26、3 蟻鼻錢 Y B 67 (阜南県・𠄎字貝) / 中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表二 18、表三 18 (阜南市・𠄎字貝) / 中国錢幣 1995 - 2、p 8 表序号 18 (阜南県・𠄎字貝)
- 91 阜陽界首：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(調査得知)(1991 - 93 年𠄎、𠄎字貝数百枚)
- 92 (阜陽) * 成分分析：中国錢幣 1995 - 2、p 8 表序号 9 - 17 (阜陽市・𠄎字貝 7、𠄎字貝 1、無文字貝 1) / 中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表二 9 - 16、表三 9 - 16 (阜陽市・𠄎字貝 1、𠄎字貝 7) / 『中国古代錢幣合金成文研究』p 26、3 蟻鼻錢 Y B 57 - 66 (阜陽県・𠄎字貝 10)
- 93 阜陽插花区：『先秦貨幣通論』p 66 図二九 3 (朱活『古銭新譚』p 41、安徽錢幣 1998 - 3)(插花区・楚銀𠄎字貝、残)
- 94 阜陽一遺址：中国錢幣 1994 - 3、p 46 (阜陽県一遺址・𠄎字貝数枚)
- 95 利辛苞河沿岸：中国錢幣 1994 - 3、p 12 (王本初「安徽近年出土楚銅貝初探」文物研究・総第二期、1986.12)(1985

- 年苞河沿岸出土・𠄎字貝 6 枚、𠄎字貝 10 余枚) / 『先秦貨幣通論』 p 360 表三〇 (安徽金融研究 1987 年增刊 1 期)
- 96 穎上湯圩: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1984 年江口区湯圩・𠄎字貝数十枚) / 中国錢幣 1990 - 2、p 71 (舟山錢幣 1989 年 4 期、所引)
- 97 穎上 1: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1981 年穎上県・𠄎字貝 30 枚)
- 98 穎上 2: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1990 年穎上県・𠄎字貝 80 余枚)
- 99 寿県九里溝: 『古銭新探』 p 196 表 (1955 年・𠄎字系貝 2 枚 (流銅あり、一枚は軽小))
- 100 寿県堰口集 1: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1989 年堰口集・𠄎字貝 300 余枚)
- 101 寿県堰口集 2: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1992 年東津郷安豊塘堰口集・𠄎字貝数百枚)
- 102 寿県瓦埠湖: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 156) (1976 年瓦埠湖南岸出土・𠄎字貝 3000 余枚)
- 103 寿県安豊塘: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1989 年安豊塘・𠄎字貝 200 余枚)
- 104 寿県 1: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1989 年寿県・𠄎字貝 3000 余枚、𠄎 10 枚)
- 105 寿県 2: 『我国古代貨幣の起源と発展』 p 93 (浜田耕作「蟻鼻錢に就いて」考古学研究、昭和 14 年) (木箱中: 蟻鼻錢 12、30 枚)
- 106 淮南唐山郷等: 江漢考古 1996 - 1、p 39 (1959 年冬唐山郷と頼山郷一帯 (寿県県城東北 3 k m)・蟻鼻錢、「殊布当忻」、郢爰)
- 107 淮南: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1990 年淮南市・𠄎字貝 300 余枚)
- 108 懷遠古城: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1982 年古城出土・𠄎字貝 100 余枚)
- 109 懷遠孝信郷等: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1976 - 92 年孝信郷・馬頭城郷・古城郷・𠄎字貝数百枚、𠄎字銅范 2 塊 (背板))
- 110 (蚌埠收購 1): 『先秦貨幣通論』 p 359 表三〇 (『安徽錢幣文論特輯』第 2 輯、p 157) (1982 年蚌埠市废品回收公司收購・𠄎字系貝 1000 余枚)
- 111 (蚌埠收購 2): 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1971 年蚌埠市废品回收公司收購・𠄎字貝 20 k g)
- 112 鳳陽霸王城 1: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1981 年霸王城 (鐘離城)・𠄎字貝数十枚)
- 113 鳳陽霸王城 2: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1983 年霸王城・𠄎字貝 30 余枚)
- 114 (鳳陽臨淮関收購): 『先秦貨幣通論』 p 359 表三〇 (『安徽錢幣文論特輯』第 2 輯、p 156) (1979 年臨淮関废品回收公司收購・𠄎字系貝 35 k g)
- 115 固鎮濠城郷: 中国錢幣 1994 - 3、p 12 (馬道開「固鎮發現楚国銅貝」安徽文博・総第二期) (1976 年濠城・𠄎字系貝 3856 枚) / 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (安徽文博 1981 - 1) (1976 年 12 月濠城郷・𠄎字貝 3856 枚、10.5 k g) / 中国錢幣 1985 - 2、p 9 (1978 年固鎮県・𠄎字幣 3856 枚出土)
- 116 固鎮新馬橋: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1989 年新馬橋・𠄎字貝 100 余枚)
- 117 固鎮垓下遺址: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1988 年垓下遺址出土: 𠄎字貝数枚)
- 118 固鎮*成分分析: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) 表一 (調査得知) (1991 - 93 年固鎮県・𠄎字貝数百枚) / 中国錢幣 1995 - 2、p 8 表序号 20 / 『中国古代錢幣合金成文研究』 p 26、3 蟻鼻錢 Y B 69
- 119 六安西古城 1: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1978 - 81 年西古城・𠄎字貝数百枚)
- 120 六安西古城 2: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (錢幣文論特輯・第 2 輯 p 157) (1982 年西古城・𠄎字貝 2000 余枚)
- 121 六安: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173 表一 (調査得知) (1992 年六安県零散出土・𠄎、𠄎、君、𠄎、𠄎若干枚、𠄎字貝残銅范 1 塊)
- 122 肥西新倉郷・窖藏: 中国錢幣 1994 - 3、p 45 (1985 年 8 月 26 日、新倉郷安河村南街生産隊郷政府路南 10 m 田埂旁陶罐内窖藏・重 25 k g、10000 余枚、中 9700 枚県文管所で揀選、9600 枚完好、四品種 (𠄎字貝 1 枚、𠄎字貝 99%、𠄎

字貝1枚、𠄎字貝2枚)

- 123 肥西新倉鄉樂河遺址：中国錢幣1994 - 3, p 45 (1985年から現在、新倉鄉安河村南街生産隊樂河北岸遺址(楚国晚期鑄錢、儲錢遺址)・蟻鼻錢2000余枚、9品種、𠄎15枚(首次出土)、𠄎200枚(首次出土)、𠄎8枚、𠄎20枚、𠄎合背2枚、𠄎1400枚?、𠄎3枚、𠄎9枚、𠄎18枚)
- 124 肥西新倉鄉樂河：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(安徽金融研究1988年增刊3期)(1986年9月、新倉樂河北岸、河底零散出土・𠄎字貝400余枚、𠄎35枚、𠄎5枚、樂5枚、𠄎4枚、𠄎合背1枚、𠄎1枚、𠄎1枚、𠄎1枚) / ?中国錢幣1994 - 3, p 12(呂長礼「蟻鼻錢又發現新品種」合肥市錢幣學會論文集、1988年第一輯)(1986年樂河北岸出土・総数400余枚、85%が𠄎、𠄎35枚前後、𠄎5枚、𠄎4枚、𠄎5枚、𠄎1枚、𠄎合背1枚)
- 125 肥西新倉鄉樂河北岸：中国錢幣1994 - 3, p 12(倪運熙、席為群「肥西縣發現楚銅貝窖藏」考古簡訊1985 - 5、安徽省考古学会編)(1985年安河村南街生産隊樂河北岸・農民吳成明が一罐掘り出す、計9240枚(一枚は𠄎、他は𠄎、大小軽重不一) / 中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(安徽金融研究1987年增刊1期)(1985年8月、新倉樂河北岸出土・𠄎字貝9240枚、𠄎字貝1枚、𠄎字貝1枚) / 中国錢幣1994 - 3, p 16(安徽考古学会主編・考古簡訊1985 - 5)(1985年新倉鄉安河村・𠄎字貝9240枚)
- 126 (肥西) * 成文分析：『中国古代錢幣合金成文研究』p 26、3蟻鼻錢Y B 6 - 97(肥西縣・𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎字貝40枚) / 中国錢幣1995 - 2, p 8表序号21 - 33(肥西縣新倉・𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎字貝13枚) / 中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表二21 - 33、表三21 - 33(肥西縣新倉・𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎字貝13枚)
- 127 合肥漢城遺址：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(錢幣文論特輯・第2輯p 157)(1988年漢城遺址・𠄎字貝1枚)
- 128 合肥西角漢墓：中国錢幣論文集・第四輯(2002) p 120(文物研究1988 - 4)(1986年1月、合肥市西角劉鄩胡大墩漢墓封土中採集・蟻鼻錢1枚)
- 129 巢湖黃山鄉：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(荆楚錢幣研究p 56)(1981年黃山鄉一罐・𠄎字貝約5000余枚)
- 130 巢湖汽車站：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(調查得知)(1989年巢湖市汽車站拓寬工程中出土・𠄎字貝80余枚)
- 131 巢湖廟集：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(錢幣文論特輯・第2輯p 156)(1985年廟集出土・𠄎字貝200余枚)
- 132 巢湖：中国錢幣1994 - 3, p 12(王本初「安徽近年出土楚銅貝初探」文物研究・総第二期、1986.12)(1982年巢集一罐・𠄎字系貝約1000余枚)
- 133 全椒城東鄉：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(皖東金融与錢幣1989 - 1)(1973年城東鄉永寧古墓区・𠄎字貝数十枚)
- 134 全椒：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(錢幣文論特輯・第2輯p 157)(1983年全椒縣・𠄎字貝1000余枚)
- 135 天長北岡漢墓：考古1979 - 4, p 329(1975年5月初、安樂公社北岡大隊漢墓M 3(北面に東陽故城)・填土中に蟻鼻錢1枚)
- 136 繁昌三山鎮：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(安徽金融研究1990年增刊4期)(1989年8月三山鎮南竹山出土・𠄎字貝52枚)
- 137 (繁昌橫山鎮?)：考古与文物1989 - 2, p 107(1982年1月、繁昌文物組が橫山供銷社廢品站で𠄎字貝銅范2件揀選) / 文物1990 - 10, p 91(1982年以前強圩村農民が房基建設時に𠄎字貝銅范二件発見、1982.2繁昌縣文化局が橫山鎮廢品站で揀選)
- 138 (繁昌) * 成文分析：『中国古代錢幣合金成文研究』p 26、3蟻鼻錢Y B 44 - 56(繁昌縣・𠄎字貝13枚)
- 139 広徳誓節郷・窖藏：中国錢幣1994 - 3, p 12(広徳文物組「誓節出土の一壇楚幣 - 鬼臉錢」宣州文物・創刊号、1983)(1982年誓節郷一罐窖藏・計1159枚(一枚合背錢)、大小、厚薄、軽重不一) / 中国錢幣1996 - 3, p 12(陳衍麟「繁昌出土楚"𠄎"字銅貝」安徽錢幣1990 - 4) / 中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173表一(宣州文物1983創刊号)(1982年3月誓節郷紅応村一罐・𠄎貝1159枚、重3.15 k g(合背1枚) / 『先秦貨幣通論』p 363(𠄎字系貝3.15 k g、1159枚、平均2.72 g弱)

山東

- 140 棗庄薛城：中国考古学会第二次年會論文集(1980) p 100、図二9(1952年薛城・𠄎字貝採集、薛城は過去出土の楚貝数量わりあい多い地方、みな𠄎字貝)
- 141 棗庄渴口鎮M118：考古学集刊14(2004)、p 80 図四M118平面図、図47・1(M118:7)、P 156 附表1(1985春 - 86年市西北4 k m市中区渴口鎮漢墓群M118(東漢墓)・陶壺2、銅五銖28、蟻鼻錢1?、石珠)
- 142 蒼山蘭陵：中国考古学会第二次年會論文集(1980) p 100 図二4(1954年蘭陵(もと魯の次(漆)室邑、のち楚の蘭陵

- 県)・𠄎字貝3?) / 中国錢幣 2001 - 2, p 28 (蒼山県蘭陵鎮一帯・蟻鼻錢出土)
- 143 郟城郟国故城: 中国錢幣 2001 - 2, p 28 (1970年代初郟国故城・楚国蟻鼻錢)
- 144 臨沂西義堂郷: 『古錢新探』 p 197表 (1967年背面内凹𠄎字系貝) / 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173表一 (朱活『古錢新探』) (1956年西義堂古遺址・: 𠄎字貝數枚 (空背1枚))
- 145 臨沂: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173表一 (調査得知) (1992年臨沂一罐出土・𠄎字貝3000余枚)
- 146 滕県木石公社: 中国錢幣 1985 - 2, p 9 (1982年木石公社・滕県博物館𠄎字貝現存計527枚)
- 147 滕県滕国故城: 『齊幣図釈』 p 29 (滕国故城・楚貝出土)
- 148 鄒県郟国故城: 中国考古学会第二次年会論文集 (1980) p 100 (1961年郟国故城 (前346楚に滅せらる)) (𠄎字貝2?、無文字蟻鼻錢1?)
- 149 (鄒県) * 成文分析: 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173表二36 - 39、表三36 - 39 (鄒県𠄎字貝4枚)
- 150 曲阜魯故城: 『古錢新探』 p 197表 (1962年魯故城址雨後収集・𠄎字系貝8枚)
- 151 曲阜魯故城周公廟: 中国考古学会第二次年会論文集 (1980) p 103 (1962年周公廟・曲阜出土の蟻鼻錢は戦国晚期から西漢早期の遺跡出土、往々にして雨後採集、すべて𠄎字貝、みな軽小) / 『古錢新探』 p 197 (魯故城周公廟漢靈光殿・蟻鼻錢少数)
- 152 曲阜董大城村・窖藏: 中国考古学会第二次年会論文集 (1980) p 100 図版陸上、上左1 (1972年董大城村窖藏、灰色陶瓮中 (破碎)、すべて𠄎字貝、多く磨損掉なし、大小軽重不一 (うち127枚大小中三種分類 (表一))、西漢半兩2枚混入 (八銖四銖各1) / 『古錢新探』 p 215 (1972年県北40余華里董庄公社董大城村東北300m一瓮窖藏・𠄎字系銅貝15978枚、多く流銅あり、大小厚薄軽重不一、大中小三種あり) / 文物 1982 - 3, p 92 (1972年魯国古城北20km董大城村東北300m高埠地帯、灰色繩文陶罐中窖藏19.2kg・𠄎字系貝15978枚) / 『先秦貨幣通論』 p 356 (1972年董大城村一坑・19.2kg、𠄎字貝15978枚 (大1.85 - 1.8 / 4.2 - 2.7g、中1.7 - 1.6 / 3 - 1.6g、小1.5 - 1.2 / 1.5 - 0.6gあり))
- 153 曲阜董大城村東: 文物 1982 - 3, p 92 (1973年𠄎字系貝8枚) / 中国錢幣 1998 - 2, p 22 (文物 1982 - 3) (董大城村東古城遺址・大量出土後に𠄎字系貝8枚発見)
- 154 泗水官元村: 考古与文物 1987 - 2, p 110 (1983年10月官元村・𠄎蟻鼻錢計95枚、三種写法)
- 155 (莒県): 『中国錢幣大辞典・先秦編』 p 35 (莒県・𠄎字系貝)
- 156 莒南西鉄溝崖村: 『中国歴代貨幣大系1』 p 33, p 1150 先秦鑄幣出土簡況表 (朱活『古錢新探』) (1956年莒南県西鉄溝崖村・楚銅貝𠄎字貝一批又109枚)
- 157 (莒南): 『古錢新探』 p 197表 (1967年莒南県、莒南文化館・𠄎字系貝)
- 158 日照: 『古錢新探』 p 197 (日照市・蟻鼻錢少数) / 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173表一 (朱活『古錢新探』) (1956 - 58年日照県・𠄎字貝零星)
- 江蘇**
- 159 徐州高皇廟: 考古学報 1958 - 4, p 8 (1956年秋、市北50華里、利国区高皇廟上層 (秦漢)・石器、骨錐、陶器、銅鏃、鏡、蟻鼻錢2、五銖錢、磨孔貝) / 『古錢新探』 p 196表 (1958年高皇廟殷代遺址上層2.2 - 3m半、灰褐土層中・𠄎字系貝2枚) / 中国錢幣論文集・第三輯 (1998) p 173表一 (考古学報 1958 - 4) (1958年高皇廟戦国遺址出土・𠄎字貝2枚、3.18g)
- 160 徐州鷄山: 『古錢新探』 p 197 (徐州市博物館・蟻鼻錢少数) / 『楚国的貨幣』 p 231 (1959年鷄山・少量𠄎字銅貝發現)
- 161 徐州十戸山: 『古錢新探』 p 197 (十戸村・蟻鼻錢少数、徐州市博物館) / 『楚国的貨幣』 p 231 (1959年十戸山・少量𠄎字銅貝發現)
- 162 徐州洞山村: 『古錢新探』 p 197 (洞山村・蟻鼻錢少数、徐州市博物館)
- 163 徐州昆山: 『楚国的貨幣』 p 231 (1959年昆山・少量𠄎字銅貝發現)
- 164 徐州塩城地区: 『古錢新探』 p 197 (塩城地区・蟻鼻錢少数、徐州市博物館)
- 165 邳県南灘子: 考古 1964 - 1, p 24 (1962年10 - 12月、四戸鎮西北3km、小馮庄、南灘子遺址 (戦国楚文化~漢代遺址)・𠄎銅蟻鼻錢、長盞三稜大銅鏃を成堆発見、また灰陶大板瓦、筒瓦、豆、罐、盆、缸採集)
- 166 邳県竹園村: 考古 1964 - 1, p 24 (1959年四戸鎮西北3.5km、竹園村と小馮村の間、南北条形慢崗、遺址 (戦国楚文化~漢代遺址)・西部辺沿で金部爰一块、蟻鼻錢、三稜大鏃多数を発見) / 『古錢新探』 p 197表 (考古 1955 - 1) (1959年竹園南堆、戦国漢代遺址・𠄎字系貝、部爰1件)
- 167 東海焦庄遺址: 文物 1975 - 8, p 51表一 (1973年3月、牛山鎮東北12km駝峰公社魯蘭大隊焦庄東南遺址上文化層 (西漢文化層)・鉄工具、陶器、銅鏃、弩機、五銖錢2、蟻鼻錢6 (上に「鬼臉」文あり))
- 168 連雲港九竜口: 考古学集刊 12 (1999)、p 128 (江蘇省文物工作隊『江蘇連雲港市九竜口商和戦国遺址』考古 1962年3期) (九竜口・蟻鼻錢)

- 169 宿遷清涼院遺址：考古 1963 - 1, p 7 (晚店東 1.5 km 清涼院漢代遺址・郢爰、鬼臉錢(蟻鼻錢)) / 東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(考古 1963 - 1) (1960 年晚店鄉清涼院遺址・蟻鼻錢 30 枚)
- 170 宿遷青墩遺址：東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(1980 年晚店鄉青墩遺址・蟻鼻錢 7 枚)
- 171 泗洪巨声村・窖藏：東南文化 1987 - 3, p 52 (1985 年 3 月 20 日、青陽鎮巨声村の高阜上、縄文灰陶罐(高 14.1 cm、戦国晩期、西漢早期)・7 kg、2759 枚(I 型(面凸背平) 1725 枚、A 式(上円首) 1101 枚; B 式(上平首) 624 枚、II 型(面背扁平) 1034 枚; A 式(上円首) 635 枚、B 式(上平首) 399 枚)、500 枚群衆中に流散、泗洪図書館 7 kg、2759 枚収蔵) / 東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(東南文化 1987 - 3) (1985 年青陽城巨声村・蟻鼻錢 3000 枚、1.8 - 1cm、1.8 - 0.3 g)
- 172 泗洪張郎咀：東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(考古 1963 - 1) (1958 年天崗湖鄉張郎咀遺址・蟻鼻錢 20 枚) / 考古 1963 - 1, p 7 (王集南 1.5 km 張郎咀漢代遺址・郢爰、鬼臉錢(蟻鼻錢))
- 173 泗洪鍋底湖遺址：東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(1964 年城廂鄉楊集村鍋底湖遺址・蟻鼻錢 3 枚)
- 174 淮陰石庄：東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表、図三 16 (1974 年淮陰市清浦区武墩鄉石庄・蟻鼻錢 1 枚)
- 175 射楊：中国考古学会第二次年會論文集(1980) p 105 (射陽・蟻鼻錢)
- 176 塩城麻瓦墳遺址：考古 1964 - 1, p 27 (塩城県東北角塩城農学院前麻瓦墳遺址(採集遺物)・漢代生産鉄工具、陶器、帶鈎、武器、錢幣(五銖、半兩、蟻鼻錢)、瓦、瓦當、封泥(漢、戦国))
- 177 洪沢塘埂遺址：東南文化 1992 - 1, p 136 図八 3 (89 H T) (1987 年 5 月 - 90 年 9 月三河郷塘曹村東南 500 m 塘埂遺址(上層)・西周、東周遺跡中蟻鼻錢 2 枚) / 東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表、図三 14 (1988 年三河郷、塘埂遺址・蟻鼻錢 2 枚)
- 178 盱眙王店郷：東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(1976 年王店郷社山村漢井内・蟻鼻錢 3 枚)
- 179 盱眙觀音寺郷：東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(1988 年觀音寺郷衡西村・蟻鼻錢 500 枚)
- 180 盱眙十里營郷：東南文化 1991 - 6, p 339, p 344 一覽表、図三 10 (1973 年十里營郷七營・蟻鼻錢 4500 枚)
- 181 盱眙東陽故城：東南文化 1991 - 6, p 339, p 344 一覽表(1972 年東陽郷東陽城遺址陳英祠・蟻鼻錢 400 枚) / 中国考古学会第五次年會論文集 1985 (1988)、p 53 (1976 年冬、盱眙県東 30 余 km 東陽郷秦漢東陽古城・耕土下に瓦礫堆積 1 m、雲紋瓦當、齊式半瓦當、陶器、五銖、秦半兩、蟻鼻錢)
- 182 金湖黎城遺址：東南文化 1991 - 6, p 344 一覽表(1988 年黎城遺址・蟻鼻錢 10 枚)
- 183 揚州邗城：考古 1990 - 1, p 36、(邗城(漢広陵城)子城、蜀崗上西北城角発掘・最下層は漢代夯土、上面に隋唐土牆体、二条探溝(西牆下の灰坑、上に漢から宋代夯土土城牆、陶器、蟻鼻錢出土→戦国時代))
- 184 揚州郊区胡場臺：考古 2002 - 11, p 35 (1960 年代郊区胡場戦国墓・銅鏡、戈、瑠璃璧、玉環、漆盤、蟻鼻錢)
- 185 儀徵甘草山遺址：東南文化第二輯(1986) p 8 図十一 5 (1982 年 4 月 - 6 月、胥浦郷西南甘草山遺址(西周、春秋戦国)・石器、骨器、陶器(大小円餅)、原始瓷、銅器、鉄器、蟻鼻錢 42 枚)
- 186 南京師古灘：『我国古代貨幣の起源と發展』p 93 (『吉金所見録』卷 16) (1783 年(乾隆癸卯)南京市(江寧)師古灘・川ざらえ申数千発見)
- 187 (高淳淳溪鎮收購)：考古 1988 - 5, p 473 (1985 年 7 月 3 日、淳溪鎮廢品站收購(高淳西舎廢品倉庫収蔵)、窖藏の可能性(集中出土、共存遺物なし)・字系貝 312 枚、字 311 枚、A d 1 枚、穿孔 185 枚、不穿孔 127 枚、辺縁未加工 2 枚(未使用))
- 188 宜興南新公社：『中国歴代貨幣大系 1』p 33, p 1149 先秦鑄幣出土簡況表(1957 年南新公社・字系楚銅貝 2 枚、鎮江博物館蔵) / ? 中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(文物 1959 - 6) (1957 年南新郷・字貝 2 枚)
- 189 蘇州靈岩山：『古錢新探』p 197 表(靈岩山東麓：字系貝)
- 190 昆山正儀郷：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(蘇州錢幣 1993 年総第 9 期) (1958 年 11 月、正儀郷・字貝 200 kg、約 6 万余枚(送收購站))
- 191 (昆山採集)：中国錢幣論文集・第三輯(1998) p 173 表一(文物 1959 - 4) (1959 年昆山県採集・字貝 11 枚)
- 浙江
- 192 湖州城区：中国錢幣 2004 - 2, p 37 (湖州市城区紅旗路觀風大厦城中城基建時発見(失散多)・陝一釐 1 枚、殊布当新 16 枚(かつて湖州城郊でも出土)、蟻鼻錢 5、600 枚前後(穿孔通、不通あり))
- 193 仙居湫山郷：中国錢幣 2002 - 2, p 30 (中国文物報 1988 年 8 月 12 日) (1985 年仙居県横溪区湫山郷上田村、印紋陶埴内・青銅器具小件 18、銅料 19、楚国布幣 2、蟻鼻錢 16、陶埴周囲に銅器残片)
- 陝西
- 194 咸陽長陵車站：考古 1974 - 1, p 22, p 24 (1962 年 3 月 14 日、長陵車站南の陶瓮「咸陽安鼎器」内窖藏(西漢以前)・銅材料塊と小件銅器 280 余件; 戦国貨幣 140 枚 15 種(半兩、安邑二釐、梁充新金当守、梁正尚金当守、平首方肩方足小布、殊布当圻、齊法化、易刀、尖首刀、古刀、蟻鼻錢(5 種 124 枚: 字貝 73、字貝 48 枚、字貝 1 枚、

無文字貝 2 枚)) / 『古銭新探』 p 208 (1963 年咸陽市東北 10 km 長陵車站南 100 m 大瓮窖藏・蟻鼻錢 116 枚 (爨字貝 51 枚、𠄎 𠄎 字貝 64 枚、𠄎 字貝 1 枚)、齊刀、燕刀殘片、三晋布錢、楚施錢当折 1、齊刀形刀頭 1、陝西省考古研究所藏) / 『楚國的貨幣』 p 22 (考古 1974 - 1) (1962 年 3 月、咸陽市長陵秦都咸陽故城遺址・𠄎 字貝大量、君字貝、無文銅貝 2 枚)

内蒙古

195 額濟納旗：中国錢幣 1995 - 1、p 78 (龐文秀『内蒙古金融研究・錢幣專刊』1994.3) (温閔高勒蘇木、格日勒因嘎查東北 95 km (漢居延故地、居延沢畔古馱道改轍の地段内)・遺址地表に滿碎陶片、建築構件：𠄎 3 枚 (銅范のよう)、陶貝 1 枚、円銅塊 1、数枚の緑柱石料塊)

追加 (表 4 には記載されていないが分布図には反映)

河南

- 1 柘城城関鎮：『開封商丘錢幣發現与研究』(中華書局、2003) p414 (1991 年城関鎮北関旧城湖・爨字貝、金字貝計 7 枚出土)
- 2 柘城郭村崗：『開封商丘錢幣發現与研究』(中華書局、2003) p414 (1876 年郭村崗遺址採集・𠄎 字貝 1 枚)
- 3 延陵陶城村：『許昌漯河錢幣發現与研究』(中華書局、2005) p61 (1990 年春、陶城郷陶城村・𠄎 字系 70、君字 5、爨字 7 枚)
- 4 禹州褚河郷：『許昌漯河錢幣發現与研究』(中華書局、2005) p62 (1992-98 年春、褚河郷潁河兩岸・零星楚貝貨發見)
- 5 襄城穎橋鎮：『許昌漯河錢幣發現与研究』(中華書局、2005) p62 (1992-98 年春、穎陽鎮・零星楚貝貨發見)
- 6 襄城穎橋鎮：『許昌漯河錢幣發現与研究』(中華書局、2005) p449 (1993 年 11 月、穎橋鎮東潁河河灘中・蟻鼻錢 10 余枚)
- 7 鄆城鄧襄遺址：『許昌漯河錢幣發現与研究』(中華書局、2005) p449 (1980-86 年鄧襄遺址・蟻鼻錢数百枚)
- 8 舞陽吳城：『許昌漯河錢幣發現与研究』(中華書局、2005) p449 (1987 年吳城・蟻鼻錢百余枚 (爨字貝、少量君字、𠄎 字系貝))

Abstract

中国古代青铜货币的产生与发展（六）——楚贝币的性质

中国先秦时代的青铜货币根据其形态可以分为刀币、布币、圜钱、贝币四大类。其中贝币被认为是楚国发行的统一国家货币、但就其发行年代、性质却分歧较大。楚贝币相对于早期都城的所在地湖北省而言，其战国后期东迁后的都城所在地河南南部，安徽，江苏等东方地区则大量出土。由此分析楚贝币在经济发达的东迁后地区大量发行，开始铸造的时间可能不能追溯到东迁以前的较早时期。在形态上，楚贝币确实是以贝作原型而制作的。中国学者一般都认为殷周时代的贝作为实物货币，楚贝币是其发展的产物。但是贝即使作为统治者之间赠与交换的财富与避邪的宝物，也不能说明其具有货币性质，楚贝币与殷周时代的贝无论是在时代，性质上都存在有断层。楚国的统治者在很久以后才由于与周文化的关系，选择了与统治密切联系的财富——贝作为货币原型。楚贝币与秦国、魏国的圜钱同样是统治者观念的产物，但是与实物货币转化而来的刀币、布币的来源、性质都是不一样的。